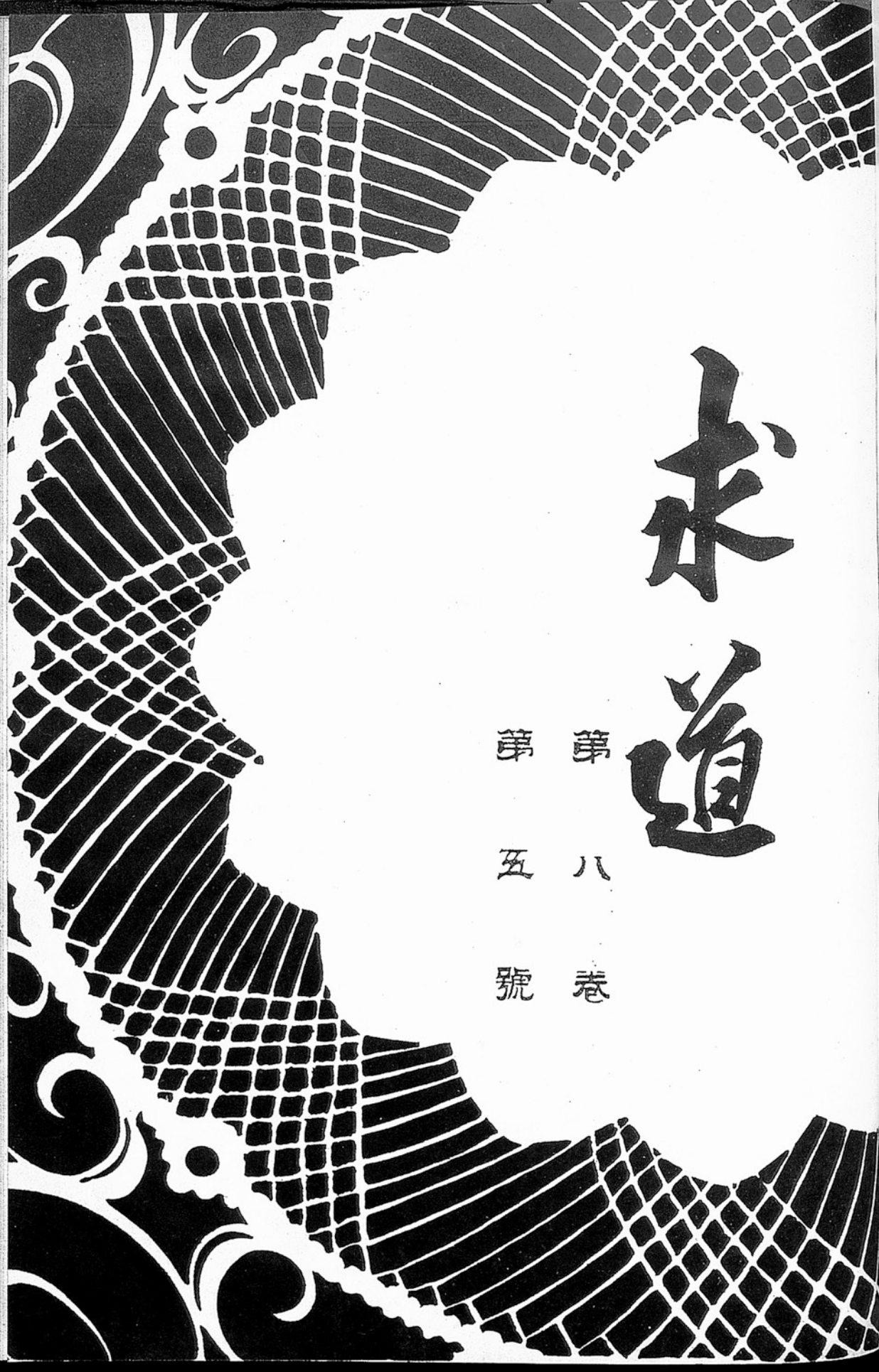




求道

第 第
五 八
號 卷

求道第八卷第五號目次

雜 錄

求 道

◎則我善親友

近 角 常 觀

◎救濟の如來

告 白

◎懺 悔

江 頭 六 郎

◎佛の相續より起る

坂 口 五 郎

講 話

講 話

每日 曜 午前 九 時

求 道 學 舍

〔本郷區森川町一帯地〕

毎 土 曜 午後 二 時

第 二 求 道 會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎 月 二 日 午後 七 時

第 三 求 道 會

〔日本橋堀込町脱教所〕

◎如來の加威力

近 角 常 觀

求 道

第 八 卷
第 五 號

救 濟 の 如 來

十方微塵世界の、念佛の衆生をみなほし、攝取してすて
されば、阿彌陀となつてまつる。

我等が信ずる如來は救濟の如來也、救濟の外に如來なし、
南無阿彌陀佛とはたのむものをたすくるとの御佛也、動もす
ればたのむものとあるの言を邪魔にするものあり、南無
の二字は聖人の流義にかぎりてあそばされたり、南無の二字
なくば如何てか如來の御心の我等に徹到すべき、歸命といふ
は本願招喚の勅命也、待ち兼ねたまふ如來の遣る瀬なき御心
なり、此大悲の我等の心に貫徹したまふ一念、初めて彌陀の誓
願不思議にたすけられまゐらせて往生を遂ぐるなりと信じて
念佛申さんと思ひたつ心のちこるとき也、是即ち和讃に、十方
微塵世界の、念佛の衆生とある所以也、如何に大悲在すと雖衆
生に貫徹せずんば何ぞ救はれん、たのむといひ念佛といふ此
貫徹の一念也、抑救ひといふは罪惡深重、煩惱熾盛の我等が

ために五劫永劫の間涙を注ぎたまひし清淨眞實の御心の徹
到して一念發起するるとき念佛自から口にあらはるゝ也、是所
謂念佛の衆生也、此念佛申さんと思ひたつころのおこる時
即ち攝取不捨に利益にあつけしめたまふ也、是すくひ也、阿
彌陀佛也、十方微塵世界の衆生をみなほし、攝取してすて
されば阿彌陀と名つてまつる、嗚呼是れ南無阿彌陀佛の
名義也、如來の御心の儘也、此御心即本願也、此本願の成した
まひし御姿即ち如來也、さればたゞ念佛して彌陀にたすけら
れまゐらすべしとは本願其儘也、念佛其儘也、如來其儘也、南
無阿彌陀佛其儘也、我等はかく信ずる外に別の仔細なき也、是
如來を信ずる也、誓願不思議を信ずる也、救はれたる也、助
けられまゐらせたる也。

救濟の外に如來なし、如來の外に救濟なし、今世の人、救
濟の外に如來を求む是れ誤謬の一着歩なり、何人も先づ此宇
宙、此人生に向て直に如來の意義を認めんとす、是絕對に救
濟せられざる所以也、抑々此世界は五濁惡世也、此人生は罪
惡生死也、此世界已上に佛境界在して此生死海に迷ひつゝあ
る我等を救濟せんと思召たちたまへばこそ、弘誓といひ、本
願といふ、此本願弘誓あればこそ無邊極濁惡の我等を救濟し

たまふ也、十方衆生のために、とて、如來の法藏あつめて、本願弘誓に歸せしむる、大心海を歸命せよ抑々本願他力眞宗とは此已上は知るべからざる也、此本願だにましまさば何の要ありて亦何を求めん、親鸞聖人『教行信證』の初に曰く、夫れ眞實の教を顯さば則ち大無量壽經是也、斯經の大意は彌陀誓を起發して廣く法藏を開きて凡小を哀て選て功德の寶を施すことを致すと嗚呼此の如き弘誓、此の如きの大寶、此五濁惡世の我等を悲憫して眞心徹到の一念極速圓融、我等が身心に入り満ちたまふ也、和讃に曰く、五濁惡世の有情の、選擇本願信すれば、不可稱不可說不可思議の功德は、行者の身にみてりと嗚呼此世界は濁世也、盲冥也、無明也、無常也、此人生は罪惡也、煩惱也、生死也、流轉也、此世界の全體に如來を求め、此人生の意義に如來を求む誤れる哉、此撞着矛盾の世界、此苦痛罪惡の人生、吾人は之を解脱するに由なしされば此人生を救ひ此世界を濟けんがために選擇本願を起し無碍の光明を現したまふ、さればこそ歸命盡十方無碍光如來と讃嘆し奉る。

聖人のたまはく、一乗とまうすは本願なり、圓融とまうすはよろづの功德善根みち／＼てかくることなし、自在なるこ

な、如來は特に罪惡深重の衆生を悲憫したまふ、親は固より我子の不具なるを悲まざるはなし、然れども不具なるが爲に益々憐愍の情は彌まざる也、五濁惡世の我等何れの行にても生死解脱の縁なきことを憐みたまひて、如來は特に罪惡の我等を救濟したまふ、是不可思議なり、不思議の誓願也、不思議の名號也、不可思議の光明也、我無量劫に於て大施主となりて諸の貧窮を救はずんば誓ふ正覺を成らじと如來ありて而して衆生あるに非ず、衆生の貧窮なるが爲に救濟の如來あらはれたまふ、是即ち報身如來也、阿彌陀如來也、若し我等生死海に漂没し、煩惱海に流轉して、出離其期なきに非んば何ぞ五劫思惟の願ましますん、永劫の御修行は畢竟我等が心の貧しきを救はんが爲の積功累徳に非ずや、我等日夜三毒の煩惱の爲に惱まるゝを憐みたまひて慈悲哀の思、遣る瀬なく欲望瞋覺害覺を生ぜず、欲望瞋覺害覺を起さず、少欲知足、和顏愛語にして我等が爲に遂に正覺を成じたまひし如來にてまします、如來は本來自然の佛陀に非ず、我等を救濟せんが爲に永劫の劬勞を重ねたまひし御親に非ずや、名號は出來合の寶に非ず、我等の貧窮を救はんが爲に積みたまひし功德に非ずや、親は子の貧しきを憐れみて之を救はんが爲に態々功德の

ゝるなり、無碍とまうすは煩惱惡業にさへられず、やぶられぬをいふなり、眞實功德とまうすは名號なり、一實眞如の妙理圓滿せるが故に大寶海にたとへたまふなり、一實眞如とまうすは無上涅槃なり、涅槃すなはち法性なり、法性すなはち如來なり、寶海とまうすはよろづの衆生をきはらず、さはりなくへだてず、みちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり、この一如寶海よりかたちをあらはして法藏菩薩となのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして阿彌陀佛となりたまふがゆへに報身如來とまふなり、これを盡十方無碍光佛となづけたまつるなり、この如來を南無不可思議光佛ともまうすなり、この如來を方便法身とまうすなり、方便とまうすは、かたちをあらはし、御名をしめして衆生にしらしめたまふをまうすなり、すなはち阿彌陀佛なり、この如來は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ不可思議光佛とまうすなり、この如來十方微塵世界にみち／＼たまへるがゆへに無邊光佛とまうすし、かれば世親菩薩は盡十方無碍光如來となつてたまつりたまへりと、

嗚呼南無不可思議光佛、不可思議なるかな、不思議なるか

寶を成就したまふ、如來は此の如きの本願を以てあらはれ、如來は此の如き功德を成就して正覺成じたまひてより十劫の久しき也、此親心を頂かざるは大悲の御苦勞を水泡に歸する也、親心を心得たりと思へるは、我惡しきが爲に御苦勞を知らざる也、若く不生者のちかひゆへ、信樂まことにときいたり、一念慶喜するひとは、往生かならずさだまりぬ、我等生死の苦海に沈淪せるが爲に如來は五劫の思惟、永劫の修行、十劫已來待ち兼ねたまふ也、このやるせなき親心をいたゞきたる一念こそ實に信樂開發の時刻也、實に往生一定の決得也、大悲の親心の徹透したる時節の極促也、是實に如來の本懷に協ひたる也、親の慈懷に抱かれたる也、攝取不捨の利益にあつかりたる也、正定聚也、眞の佛子とされる也、超日月光この身には、念佛三昧行せしむ、十方の如來は衆生を、一子の如く憐念す、子の母をよもふごとくにて、衆生佛を憶すれば現前當來とほからず、如來を拜見うたがはず、南無阿彌陀佛此の如く救濟の如來は我等を救濟せんが爲にあらはれたまふ也、かく我等が爲の如來也と信じまゐらせたる一念即ち救濟せられたる也、否我等が爲にあらはれたまへる御心の我等に届きたまへる時さても、我爲の御親にてまします

と頂き奉る、これすなはち信心也、決定也、念佛也、稱名也、名義相應也、如實修行相應也、曇鸞大師曰く、彼名義の如く如實修行相應せんと欲すとは、彼無碍光如來の名號は能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満たさふ、然る稱名憶念することあれども無明由存して所願を満たさるものは何んとなれば如實修行せざると、名義と相應せざるに由るが故也、如何んか如實修行せざると、名義と相應せざると爲す、謂く如來は是れ實相身也、是爲物身也と知らざる也と鳴呼南無阿彌陀佛の御心を頂けるは名義相應也、盡十方無碍光如來の光明に遇ひたてまつるは如實修行相應也、我等が罪業深重、煩惱熾盛なるがために慈悲泔哀の御心やるせなく本覺實相の一如海より姿を現して法藏菩薩と名のりたまひて、不思議兆載永劫の間三業の修したまふ所、一念一刹那も眞實ならざることなく清淨ならざることなき如來の御心をいたゞき奉る、是れ如來は是れ實相身也、爲物身也と知り奉る也、親鸞聖人のつねのおほせには彌陀の五劫思惟の願をよく案するに、ひとへに親鸞一人かためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懐候ひしも、畢竟我等が

爲の如來にてましますことをしらせたまひし也、かく如來をして御苦勞せしめ奉りたるも畢竟我等が現に是れ罪惡生死の凡夫にして常没流轉して出離其期なきを以て也、嗚呼我等何の幸か聖人の御教化に遇ひ奉りて此大悲の御心をいたゞき奉る、報恩講式文に曰く、茲に祖師聖人の化導によりて法藏因位の本誓を聞く、歡喜胸に充つ渴仰肝に銘ず、若し聖人の御出世なかりせばいかて此の如き甚深の親心をきき參らせん、さればかたじけなくも我御身にひきかけて我等が身の罪惡の深きほどををしらず、如來の御恩の高きことををしらずして迷へるを思ひしらせんが爲にて候ひけり、嗚呼此如來在らずんばいかてか罪業の深重を知らん此救済ましますんばいかでか四無碍の信海に入らん、嗚呼救済の如來也、救済に與りて初めて如來を知り奉る也、

蓮如上人御文、常に南無阿彌陀佛のいはれを聞き聞くを以て信心也とのたまふ、動もすれば單に字義の講釋の如く六字の訓話の如き感を爲すものあり、是れ御文の平易にして而も信仰的にいたゞき難き點なり、然るに是れ全く名義相應の信相を示し我等が爲に起したまへる本願名號の御心を顯はしたまふ也、本願招喚の御心をきいて一念發起したる時阿彌陀佛

後生たすけたまへとたのむは南無の二字也、たのむ衆生を阿彌陀佛のよくしめして深く喜びましめて八萬四千の大明を放ちて其行者を攝取したまふが阿彌陀佛の四字也と八十通の御文一として此意ならざるなし、是全く信樂開發の一念大悲の親心をいたゞきまゐらせて心光攝取の實驗を示したまふ也、歎異鈔に所謂、たゞ念佛しては南無也、彌陀にたすけられまゐらすべしは阿彌陀佛也、彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をばとぐるなり、と信じて念佛申さんとおもひたつてゐるのち、時は南無也、すなはち攝取不捨の利益にあつけしめたまふ也は阿彌陀佛也、行卷に曰く何に況んや十方群生海、斯行信に歸命し奉れば、攝取して捨てたまはず、故に阿彌陀佛と名つけ奉る、是を他力と曰ふ、是を以て龍樹大士は即時入必定と曰へり、曇鸞大師は入正定之聚と云へりと嗚呼南無阿彌陀佛の外に救済なし如來は救済の如來也、他力は救済の御力也、念佛成佛は眞宗とは純救済の御法也、南無阿彌陀佛。

懺悔

告白

江頭六郎

江頭六郎とはこれ煩惱具足の僞名にて、道徳とか修養とか時には宗教とか云ふ肩書を、勝手につけて永々の間家出してゐた、とても一筋縄でゆかぬ放蕩息子であります。が、この度はやるせなき親様の手をかへ品をかへての御迎へにて、つい一途げ路ない様に捕はれたのであります。昨夜近角先生に告白を書けと云ひ附かりまして、仰せに随つたのであります。願れば九て夢の様で、又酔から醒めた様な氣がしてあまり馬鹿らしく、筆執る張合も無いのであります。然してこれ善知識の仰せ、こゝに暫らく皆様の前に彌陀哀哀の御慈悲を喜ばせて頂きます南無阿彌陀佛。

あゝ實に苦しかつた、永い間の年月、福岡の師範學校を出たのは明治四十年三月だつたが、在學中の四年間、卒業後の四年間、殊に四十二年の暮れから四十三年の春にかけ、人は花に浮かれて居るのに自分は只一人で、身に持つ傷を秘してゐた時の苦しさ、今思ふばかりでも、どうして、あんな苦痛が押し通されたのだらうかと、身が一寸になる様な氣がする。而も、當時はさ程に苦しいとは思はないで、凛々しく、勇士が戦場にも戦つてゐる様な氣であつた。それも名利を

憧憬する自分は他を顧るの暇がなかつたからであらう。」
師範學校在學中に養ひ上げた奮闘主義は、旗色愈々鮮明となつて社會に出ました。在學中も徳風の維持、校風の振興を以て、深く自ら任じてゐました。此處に私がどうしても忘るゝことの出来ない譽田豊吉と申す先生が居られます。先生は私の卒業した年、一時學校を辭して、御子供二人までもあらせらるゝ御身であらせられ乍ら、笈を負ふて御上京遊ばし、今は慈光の下に再び母校に子弟を薫陶して居られます。何時でも私の苦しみを導いて下された終生忘れられない大恩人であらせられます。此の先生が校風振作の御思召から、論語を思ひ立つて下さつたのは、私が三年生の時でしたが、道徳臭ひ私共が眞先きに驅けついて、却て先生の御志を害つたことを耻ぢ入ります。

風教の維持發展、國民教育の大任を双肩に擔つて社會に出た私、今から思ふと丸で氣違ひ込んで、どこをどんなに敵いてあんな音がしたのかと驚くばかり。「苦は樂の種子樂は苦の種子。」「一日不爲一日不喰。」「世に不可能事無し」とは、當時私の虎の巻でありました。特に譽田先生から賜はつた「天は各人に同一の時間を與ふ、凡人が惰眠を貪る間に偉人は大事業をなすなり。」てふ言葉は、全く私の日常の行爲を規範すべく奮闘し、其の極端なる結果苟も人と共にすべき花見遊山其の他一切の娛樂をせないことに決しました。兎に角かくして初めに奉職した學校に二年間務めまして、相當に社會の信用を受けました、今思ふと、丸て人を偽いた様な思ひが致します。私が最も標榜してゐた、ナポレオンの「世に不

可能事無し」といふことを、此の二年間に次ぎの様な不可能事に遭遇しても相變らず、否な益々固守したこと不可思議さ、愚かさよ。其の不可能事の一は、四十年の夏腦充血から神經痛を引き起して久しき間苦しみ、次で四十一年正月チブス症の風邪で一月あまりも病床に苦しみましたが、何等事變つて感ずる處もなく、奈翁の言は益々私の胸中に高ぶる許りでした。次ぎに、今一つは入學試験の失敗、これも負けず氣の私には、只色々の失敗の理由を造りて、止むを得なかつたとして、恬然として耻ぢなかつた。然し、この時分から、それとはなしに、一種の苦痛が襲つた様に思はれます。

四十二年四月、義務教育年限延長の結果、當極の振擡と地方の懸望とに由つて、其の地方で最も優良なる學校に、首席訓導として赴任することになりました。其の校長と申すは創立以來の校長で、地方の徳望一身に集り、且つは教育界の柱石で、恰も増築記念祝賀會などで校長畢生の精力を傾注し、學校はまだ一向落ち着かないのに、五月から病氣で引き入るゝことゝなりました。小心弱年の私、恰も暗夜に燈火を失せる思ひありて殆んど爲す處を知らず、善意を以て爲すこと皆な惡意を以て迎へられ、同僚との折合甚だ不穩にして或は流言起り、校長の徳を以てするも治するに難き二十有餘の職員なれば恰も思ひ／＼に旗を翻へす亂世の如く、統一なく秩序なく、私の苦心は實に言語に絶するものがありました。遂に憂鬱症に陥つたのであります。かるが中に、昨年失敗した高等師範學校入學試験は眼前に迫つてゐる、今居る學校がこんな風だから一日も早く去りたい、而し此の際去るは男子

の本領でない、又許されもせない、寧ろ試験に合格して一には昨年の耻辱を雪ぎ、一には此の苦境を脱したい考へから試験を受けることに致しまして、試験前一週間許りから、準備のこともあるし任地を去ることにしました。發たんとする其の朝校長の死が報ぜられました。實に惜しいことでした。その生前の功勞を思ふて、盛大なる村送を營みました。かくて、漸く試験の期日に間に合ひ歸つて見ますれば、暗雲愈々とおこめ、今までは病中乍らも校長ありしがため大いに氣を強からしめたのが、今は全く據るべき舵を折られて右へも左へも行かない様になりました。校長の死は十月の始めてしたが、新校長の赴任したのは年の極く暮れつ方で、やつと落ちていた様な氣でしたが、一度敗れた同僚間の折合と、一旦認めたら自身の内心の缺陷とは、益々其の身の孤獨を感ずる許りで、益々世にそねるばかりでした。而も、受けた試験が再び失敗となつたので、私の心は丸で泣き面に峰とても申すべき有様で何とも仕て見様の無い様になりました。人の心と云ふものは實に奇妙なもので、「世に不可能事無し」と意氣まいて、蒼空をも呑まんばかりであつた、私の心は豆の様に小さくなつて来て、不可能事無しと、唱へ出した奈翁自身ですら「セントヘレナに、怨を呑んで憐れなつたではないかと云ふ史實を、今まで千も承知してゐながら、不可能事なしと云ふことに心酔して一向に氣附かないであつた。私の名利心の強いことは此の一事でも證するに充分餘あることゝ思ひます。さあ／＼既に、かうなつて見ますれば、恰もメリヤスのシャツの縫ひ目が一處切れた様に、止まる處なくズン／＼綻び、

乾いた薪に油をかけて火を點けた様にズラ／＼焼かれてしまつて、全くして見様の無い様になりました。又して、時もあらうことに十年來私唯一人の水魚もたゞならぬ親友が妻帯せねばならぬ事となりまして、かゝる時こそ友の道を十二分に盡さずばと、頼まるゝまゝに只一身に引き受けて、目出度き結果を得ました、が色々複雑な關係上戀愛なるものが私の心の虚なるに乗じて來ました。友の結婚は四十三年の三月に整ひましたが、その後は全く友を奪はれた様な氣がして、私が今まで苦しんで居る時指導となつて居て下さる、譽田先生は居ませども、先生といふ一種の何だか壁があるので、此の友の様に全部打ち明けた相談も出來ず、而もこれからは此の友にも隔て心が生じて、今は愈々只一人で苦しめねばならぬことゝなりました。人は、誰れでもさうだらうと思ひますが、苦しい時、身の不遇なとき、たゞ聞いてくれる誰かゝあれば満足します。聞いてくれた人が、その我が身の不遇苦悶を除くことは出來ぬが、たゞ誠心を以て聞いてくれれば十二分に満足して、未だ天下は我が物の様な氣が致すのであります。今まで私はこの友を有してゐたのが不意に裏切りされた様な氣がして愈々たまらなくなりました。あゝ士は己を知るものゝ爲めに死すとかや、我も此の己を知るものあらば死も亦恐れざるべきに、空裏缺陷を感ずること限りなく、天地も壊れん許りの私の悶えてありました。病氣と稱して、學校へも出なかつた、今から思ふと驚くばかりであります。死をも恐れざる其の當時なれば善惡正邪の何等の區別も認めず、而も、煩惱の駒は燃え立つばかりで、實に私の運命は危機一髪

である。自暴自棄とは正しくかゝる時に生ずるものであらう、如何なる正義の力にも抗しかねぬ力が潜んでゐます。

さはさり乍ら、かゝる中にもまた悪人たることは好まな
い、道念は時々暗中から顔を出した様に、而も此の窮地を免
がれたためか頻りにその道を求めてゐました。佛書も此の頃
から盛んに繙き始めました。人生の歸趣についても色々考
へました。考ふれば考ふる丈益々不可解に陥る、恰も泥中
にはまりて身を脱せんと悶躁けば益々深入りする如く愈々以
て悲境になりました。忘れもせない六月二十八日の夜であつ
た。いつもながらにつくねんと物思ひに沈み、だらしなくも
床に入りて朦朧としてゐた、夜更けて静かなる、萬籟絶えて
世界は正しくこれ眠りにつきたらんが如き寂寥を破る枕頭の
置き時計の忽然として十二の響を四邊に漂はす一刹那、豁然
として胸中に聲あり、恰も電氣にでも打たれたる如く、がば
とはね起きて端座すれば、多年の宿疑快刀亂麻を絶つが如く
開け来りぬ。あゝ我れ過てり、我に絶對の親あり我を導
き給ふこと恰も慈母の赤子に於けるが如くである。今赤子漸
くにして這ひ、或は炭火を掴み熱湯を覆さんとす。母之れを
見て何等の言なく直ちに走つて之れを制せん、赤子如何に號
泣せんも母何等の説明なかるべく、而して赤子の身は安全な
るべし。之れ慈愛の母、智識の母の赤子に對する態度ならず
や。我亦此の赤子にして此の赤子を守る絶對の親我れにある
を知らざりしなり。あゝ我過てり。されば我は何事も私
意を挟むべからず、一時は苦しさことあるも一切のこと之れ
此の慈母の心に出づ只直にこれに服すれば可なり。生死又此

らず考へました、これならと思つて翌朝は取る物遅しと先生
にかけついて、それでは私の悪いことは全々判明しました、
此の悪い私が横着なりしことは申しわけもないから今少し：
……と申しますと、先生申されるにはそれは遠慮心だ、と其
の時御馳走の例やら手織りの著物やらについて殆んど三日三
晩の間私一人の爲めに説いて下さつた。そこで私は又々進退
谷まつて、進まんとすれば横着だと云はれ、退かんとすれば
遠慮なりと咎められ、「それでは先生私どう仕ます、」と云つ
たばかりでした。それから當夜は遠慮心と横着心といふこと
を説かれてある求道を頂いて歸り夜を徹して或は讀み、或は
長大息したことでありました、たう／＼解らないで佛だの何
だの全く兒戯の様な氣がして翌朝先生が久留米へ發たる、時
も御見送り申すことすらうるさくなりしました、朝飯を喰つ
て居ますと、不意に、「煩惱具足と信知して本願力に乗ずれば
すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ」と云ふ御和讃に
氣付き、そうだ、煩惱具足と信知する、あゝ今まで何だかん
だと云つて、自分の如何なるものか知らなんだ。あゝ／＼
こゝだつたと、持つ箸投げて停車場に先生を送つたら、これ
を訴ふる暇なく同車申し上げて久留米まで行きました。其の
時先生に申し上げたこと、今に記憶して居ます。「私は自分の
白い服にしみがしたから洗濯屋にやつたら、散々に汚して返
された様なものであります。」と、あゝ永い間私が法を求め道
を聞いたのは、全く自分を美しくせん爲めてあつたのに、抑
々自分は汚れきつたる罪惡の塊りであつたあゝ／＼
これから頻りに念佛が口をついて出てますので遂には人に

の親の心に出づ安んずべきなり恐るべきに非ざるなり。と
之れが私の其の時得ました信念でありました。それから今ま
で暗雲に閉されて居ました天地が俄かに開けて快々として悲
しめるもの忽ちにして快々として楽しむ様になりました七月
に休暇になると直ぐに長崎に飛び先づ牧師と信仰を談じ或は
之れを説伏して心ひそかに彼等の信なきを冷笑し、八月福岡
に來つて醫科大學佛教青年會の夏季講習會にて前田博士の講
演を聞き、益々自分の信地を固くする思ひありて任地に歸り
ました。今思ふと實に危険なことでした。その當時も色々な
日常の問題が何となく氣に掛つて居ましたが、然しこれは未
だ信を得たることの目淺ければならん、行く／＼信を固めて
若しや佛教が自分の此の所信と異なるならば自分は一派を開
かん位の意氣込みで、飽までも私の名利心が頭上げて居まし
たことをいぢらしく思ひます。これが即ち私が、時々宗教の
肩書きを勝手につけて人を偽いたことの懺悔であります。而
しこの事は未だこれであつたのであります。

八月十三日と思ひます。羽犬塚と申す處に譽田先生の御講
演があるので、聴聞に参りました。實に佛の御引き合せと
申しませうか近角先生に邂逅したのであります。先生の御事
は兼ねて承はつて居ましたが、今度偶然此の地で御法を拜聴
仕ることゝなり非常に喜んで、譽田先生から御紹介を頂き直
ちに私の所信を開陳しましたら、先生只一言の下にそれは自然
主義なり、お前は同胞にもあらず同行に非らずと、はねつけ
られ、次で懇々と御説き下さりましたが、中々合點が行かな
いて只々失望したばかりでした、それから當日は夜の目も眠

氣でも違つたのかと疑はれました。此の時の喜びは決して偽
物だとは思ひませんが私がとても一筋や二筋纏て行かぬ放蕩
息子だと申しますのはそこなんです。兎角その時は眞に御慈
悲を聞いて、我が眞の友に逢つたので無上の大安心か得まし
た九月七日の日誌にはこんなことを記してゐます。「佛に求む
處を人に求めたり。余は今春來非常なる苦惱に陥り、今まで親
切と思ひし友が頼に不親切になり、今まで頼りしことは凡て
便りなきに至り、見るもの聞くもの一として余の心を惱まさ
るはなかりき。かゝる時こそ父母あり兄弟あり親友ありと
思ひしに……あゝ余や誤てり、此の助けなき余に、絶對に
同情するものは、宇宙間只一人如來のましますのみなるに、
抑々何たることぞ、求むべからざる人に求めて得られざるは
當然なるに、却て之れを怨みたり。あゝ何たる淺聞しかりし
ことよ。」と、而して先きに失敗した、入學試験が再び來まし
た、今度は成敗の豫期もなく、只行きかゝり上再び受くるこ
とになりました。

十月四日から同八日まで福岡で試験を受けました。そのた
め九月二十五日福岡に行つたのでありました。翌二十六日に
こんなことがありました。終日思慮す。吾は何故に高師に入る
？財なく、智なし、さればこれを得んが爲めか？余は、あま
り此等の必要を感じざるなり。然らば何の爲めに入らる？又
よく／＼考ふるに、我に準備もなき也。バツスを僥倖して受
験するか？僥倖に卑しきものかな！止めなんか／＼？この
事譽田先生に訴ふ。先生申さく、「君の今日の態度合格不合格
は已に眼中に無かるべし、然れどもこれまでに手数を進めて受

けざるは却て不可なるべし。兎に角受くへし。」と余は先生の言に随つて受験すべし。而し、此の受験を無意義とするものなり然れども、人間萬事意義無かるべし。受験入學亦無意義なり。余は無意義に無意義の試験を受くべし。こは、其の日の日誌のそのまゝであります。皆様これて私の信仰に疑なきことが出来ませうか。今年八月三十一日の記録にはこんなことがあります。『吾が言行所作一として我より出でずといふことなし。實際其の場に處しては一々立派なる理由も立ちて一點不淨の我なきに似たれども、その實一として我の妄動に由らざるなし。傷むべし悲しむべし。昨秋入學試験の前々日不意に試験を抛擲せんことを豊田先生に謀りぬ。時に吾が理由とする處は正々條理あるものなりき。然るに今にして知る、吾が當時の心を。吾には準備なく又自信もなし、失敗すべきは目前の炬火よりも明かなり。寧ろ試験を放抛して世の評價を隕さざらんには如かざるべしと。この名利心は吾が心底に萌して試験中止を叫ばしめたるなり。而もこれその一例なり。兎に角八月に近角先生に邂逅しまして有頂點になつて御慈悲を喜んでゐましたが、私の信仰は未だ徹透せないで沈滞せる池の様に次第に積極なき消極となりました。其れからは各種の方面に法を説いて雑誌やら書籍やらを讀みして、現在世に最も行はてゐる自然其のまゝが恩寵とか、そのまゝの御助けとかいふ惡平等、一種の自然主義に不智不識の間に陥りましたして、私は今回は不思議に試験が好都合だつたので去る三月に上京致しました。善きに惡きにつけ、人の境遇の變つた時にはその心に一種の變調が起るもので、これを動機に又

々私の心中に厳しい不安が生じたのであります。丁度此の時に前に自ら豁然大悟したと申しました自然主義の思想と當時盛んに讀んだ又盛んに聞いた一種のあきらめ主義とで勝手に解釋つけかけたのであります。因に當時は近角先生の御講話はほん御役目的で自ら足も遠くなり學校の佛教會に毎週先生の御出でになることが厭やになつて、勿体なくも或る時は先生に而も公衆の前で先生の御講話の千篇一律で而もくどらしく長々と長談議をせらるゝのが五月蠅さいと申ししたことすらあります。實に何たる私の横着さてせうか南無阿彌陀佛

六月十六日の晚學校で佛教會の茶話會ありました。その席で私が「人生の一面は暗黒で如來の御光りに打たるゝ時は光明を覺ゆ、故に或る人の申された通り此の人生は灰色である」と申しました、その灰色と云ふ一言で私の信仰の程が疑はれまして深く――先生から御戒めを蒙りました。私の信仰は何か茫然として私自身にも何だか奥歯に物の挟まつた様な感じが致しまして、兎に角學期試験もすませて、七月十日から房州に避暑しました休暇中は此の青松白砂の濱に逍遙するつもりでしたが突然病氣に取りつかれました七月二十九日から歸郷することになりました。何だか自分の信仰に狂ひが來たことをそれとはなしに自覺しました私は、夕立前の天氣の様に重くるしい思ひが致しまして、此の不快を旅行に托して自然の間に優遊せんものとして、伊勢奈良の舊都を訪ふて西下致しました。當時私がいかにそこはかとなき不安の中に苦しみ

しかは漂浪紀行といふ當時の紀行を見れば歴然として居ます要するに私には秘密の借錢が残つてゐたのでありますか。

くて八月八日に近角先生が羽犬塚に御傳道なされたので
 參聴致しました。私が參りましたので先生が非常にお喜びに
 なる、私の信仰は兎に角として、先生に御面會申した喜びの
 足らないことを内心に深くいぢらしく思ひました。丁度其の
 夜法兄吉田藤吉氏が竊かに、「君は心中一點の秘密なきや如
 何」と打ち込まれて、胸にギツクと答へました。それか
 ら色々法兄に突き込まれ引込まれ致しまして、今まで空模様
 の惡かつた天氣が一時に盆を覆へす様な暴風驟雨となりまし
 て、ついに先生の前に出て、我が無信仰のことを明かに云ひ
 放ちました。先生眉を顰めて却て之れを否定遊ばされ、法兄
 は又非常な權威を以て私の信仰について先生に反對されまし
 た。その場の光景は誠に變なものでありましたが、つい
 〳〵彌陀の方便空しからず攝取されてしまひました。あゝよ
 〳〵案じますれば私程、名利の強いものはありません、先
 生が羽犬塚で私の信仰を始めに主張されたのはその前先生に
 お分れ申すとき、求道學舎の告白にて、私にはちやんと先生の
 灰色の人生てふ呼吸を知つてゐますので、勿体なくも先生の
 前にこの點を繕つてゐたのでありました。私の偽善はかくも
 煩縛いのであります。永い間親様を泣かせました。して何か
 ら何まで此の一筋縄で行かぬ私に善巧方便して下された御苦
 勞を思へば只々南無阿彌陀佛と頭の下るばかりあゝ……私
 は修養の結果は晴天白日心にかゝる雲もない様になれるのだら
 うと永の年月此の理想境に憧憬れてゐまして、昨年煩惱具足
 と信知してと申す言葉に我が身は惡の塊りだ、此の惡の塊り
 をお助け下さる有り難さと、押しつけ安心で中心不安を抱い

てゐましたが、此度此のたび眞に安すゝの身にして頂きました。何が何だか知らないけれど、悪い者をお助けの本願だと今までは自ら努めて水中に潜つて居た様な氣が致しまするが、今はヨットに乗せられて波靜けく風光妙なる湖上を走せ行く心地ぞ致します。修羅の巷であつた人生が忽ち平和の世となりて敵と怨みし友達も互に手をとる同胞となりました身の前途を思ふては、生死の思ひに沈みては天地も崩れんばかりに苦しみしものが驟雨一たび去りて、み空に高く皎々たる月を仰ぐ心地の致されます。あゝ何たる有り難き御慈悲でせうか。南無阿彌陀佛々々々々々々。

あまり急なりしたため只のべつに筆にすかせて書きましたが要するに煩惱に妄動してこれまで苦しんだ私の懺悔の一條で信後の煩惱亦之れに等しけれど、いさゝかも問題とならず雲霧消散の思ひ致します。あゝ有り難や／＼

十一月十九日



佛の相續よりおこる

坂口五郎

私は呱呱の聲を擧げて未だ四ヶ月にも足りない、生れ出たの赤坊であります。浮世の事は、未だ経験も浅く、理解も薄いのて何も存じませんが、唯々私の胸中は悦びの情にて満たされて居る者であります。あまりに悦ばしく、あまりに嬉しき爲に、勉強も手に就かず、笑つたり泣いたり、心の蟲は常に躍て居ります。今日は先生から雑誌に載せるから告白を書けと命ぜられました。大に困りました。私は未だ口に言つたり字に顯したりするまでに心が落ち付きません。私の此の胸中を充分に書き表す事は當分は出来ません。されど先生の仰せでありますから、不文を顧みず出来得るだけ申し上げます。順序としまして、私の幼年よりの心の状態の變化を申すのが至當とは思ひますが、あまりに長くなりますから、苦悶の時代の心地から申そうと思ひます。私の宗教を熱心に聞き始めたのは、昨年御茶水寄宿舎に居る頃、流行病の爲に友人が三四名同時に死亡したる時からであります。世の中の無常なることを始めて感じ、人の命の墓なき事をも歎じ、此れが爲に多く人が悲哀の情につつまれ鬱々として日を暮す有様も感じ、是非とも宗教に依て安心したいと云ふ念がささして居りました。其の爲に昨年の夏休暇は信仰ある先生方に種々の質問を出しまして、宗教と云ふものは厭み嫌ふべき者ではない、面白い

者であると思ふたのです。「古英勇と宗教」又は「偉人の信仰」などを思ひ浮べて、そゝろに宗教の奥義を極めたいと云ふ念に駆られたのです。其の爲に宗教家につきまといて出来得るだけの質問を爲し、又佛教夏期講習會にも出しまして、一ヶ月ばかりの内、宗教學者になつてしまいました。理屈は随分出来る、然しどうも了解できない處に來ると其處が不思議であるとおし通してしまい、自分は此れて立派な佛教信者である、此れ以上は身も心も慎しみて、大いに勉強して父にも兄にも安心させねばならぬと念ふのみで、自分自身の心には何も氣付かざれども、これ畢竟世を渡る爲、心を清くする爲、不動の心になる爲、老いたる父を安心させる爲、又、一歩進んでは名譽の爲、虚榮の爲に過ぎなかつたのであります。榮利を思ひ、名譽を慕ひ、置位に憧れる如き、實に不真面目な實に愛されはてたる取り所のない私であります。然し此の名利の魂を利用して此れまで引き入れて下さつた寛大なる御親の圓満なる智慧には感謝せずには居られません。

私は吾が心が虚榮心に満たされて、善男善女のお仲間入りとなり、空想上の御親を拜して有難いと手を合せ念佛を絶やさずして、隙あるごとに郷里の先生に向て、御親の有難い事吾が身の淺ましき事煩惱具足の吾が身である斯の如きものを能くも御親は見捨てずに慈悲の涙を以て守つて下さる感謝に絶へぬと頻りに手紙を書きました。先生も非常に悦ばれ、父兄も安心する、雨の降る様に賞め言葉を頂戴する其の嬉しさ、心が天涯に飛んで居る様な心地で、呼喚自分は此れて信者である、身も心も御親にさへけて、其の恩徳は身を粉にしても報せね

ばならぬ、大に勉強もせねばならぬ「雪と云ふものが降てよ今年竹」斯の如きの吾等に此の廣大の佛陀がまします、嗚呼ありがたいと、深更に至るまで、佛典を耽讀し又は形式に満ちた手紙を書いて、念佛三昧に耽つたものであります。

一

ア、然し此れは私し信仰の一階段でありました。片足は岸にあり片足は舟にあり、而して其の片足を以て其を動かさんとするものであります。自から力つきて水底に沈むべきは當然なぬかれざる所であります。私は今迄かつて経験せざる人生上の出来事に苦悶を生じたものであります。斯の如き事があらんとは私は豫期しなかつたのであります。自分は精神修養は己に進み郷里の先生よりは愛でられ、親や兄等よりも重ぜられ大に面目をほこした。此れよりは奮闘一番他日の成効の花は掌の中にありと思つたは私の空想であります。豊東なき理想であります。然も豫期したる事と全く反對の逆比例の失敗を招いたのであります。虚榮に憧れて氣も心も浮いて居る其足下を拂ひ去られたる感じがあります。谷底深く蹴落されたる感であります。今迄自分は誤まつて居る。郷里の先生に何の面目があらん、親兄弟に何の面目があらん、知己友人に對して何の面目があらん、學友諸氏に對して何の對面がある、常識にも程がある、修養の足らざる事も程がある、斯くの如き事にならんとは何故氣付かなかつた、友人もあれ程云つて呉れたのに何故に聞かなかつたか。又自分が此の悲運に落ちる事は知れて居るのに友人は何て熱心に忠告して呉

れなかつたか、實に不満に絶へなかつたのであります。失望もした、落膽もした、悲觀もした、煩悶もした、其の時の心地を少し述べて見様と思ひます。私は此の失敗を郷里の兄に通知しました。如何にお呵りを受くるも如何に罰を受くるも、私に於ては甘じて受けます。不勉強であつたに相違ないと咎めを蒙りても私の辨解の言葉を持ちません。唯此の後の處置と皆様の御意見とを承りたいと申しやりました。然しさすがに郷里の先生には手紙は出せなかつたのです。あまりに面目がなかつたのです。老体の父上は勿論家族の者が如何に落膽せらるゝかと思ふと胸中の鬱々尙増すばかり、親不孝も此れまで甚しきはないと思ひて苦しみますが、此れ以上の残念なるは、自分は出来るだけの勉強もなし人以上に奮勵した積りであるに、此の成績にては又立つと雖恢復は頗る難問であるなど心は豆粒の様になり、奮ひ立つ元氣もなくなりてしまいました。さうかと云つて悲觀の模様を示したくなく、此の男の顔は立てねばならぬと云ふ強情心は去りません。

自分は薄志弱行である、一度の失敗に元氣を落すとは男らしくない、將來を待て如何なる時にか再び花の春を作て見せよう。昔は十年の恥を忍びて臥薪嘗膽した例もある。吾れは今暗黒面にあるけれど何れ近き將來に於て光明面に返して見せる、僅かの短日月惜むに足らず、何ぞ苦しむなどと思ひました。吾れ男子と生れ斯の如く悲觀するとは何事ぞ、鐵より堅き男子の決心何て撓まんやア、弱はかりき弱はかりきと將來の希望を指してやつと斯くまでは慰めた事もあります。然し心の奥には憂鬱の念はたへませぬ。私は私の心を斯うし

て慰めました。近き將來に於て會稽の恥をそゝいて見せる、知己友人も今は嘲弄ふ笑をあびせると雖も、今に此の恥は必ずそゝいて見せると決心して慰めましたけれども、此れは一時の慰安に過ぎません。此れが爲に今まで敬慕して居た郷里の先生、親しかりし親兄弟も、又は手に手を携へて相救ひて呉れた學友も一時に敵と見、一時に距を作り、一時に遠かり、私は唯今迄の見ざる孤獨の感寂寥の感に打たれました。クラスの者よりは一時に蹴落され、下級のものよりは輕蔑を以て迎へらるゝが如く見へます。郷里の先生にもすみません。今迄は善男善女の仲間入りをして見せかけましたが、偽善者でありました。それでも偽善者と思はれるはつらい。何て佛様が有難いなど云ひだしたか、何て先生に信者振つた手紙を書いたか。然し自分は事實に有難かつたから有難いと云つたのである、又自分は淺ましいものであると見たから淺ましき愚かなるものであると申した。お坊さんの子でもないのに坊さんの真似をして、お經を讀んだり珠數を捻つたり其の様な間ぬけた真似を何てしたか、お茶水會員には袈裟持ちの五郎とまで綽名された。何て此の如き綽名までつけた。佛様が事實に有難かつたのである。棒が降つても槍が降つても虚言は云はぬ。自分は偽善者ではないのだと云ふては苦しみます。私の周囲の見る者聞く者吾が敵ならざるはなく吾れに同情を寄する人は一人もありません。唯々淋しき感じばかりでありました。其れのみならず他人より批難、攻撃をせらるゝ如く嘲弄せられつゝあるか如く感じ、人の中に出づる事をさへ堪へ難きばかりでありました。光明を求むるよりも、むしろ暗黒

を求めたのです。然れども此れ位の事に悲觀し煩悶するとは何事だ、瘦せても枯れても男一匹に生れ來て、此の有様は何だと自から責め立てる。出來ざる笑ひを尙も作り、無き元氣を尙も奮ひ、唯々胸中の鬱を人に知らさじと勤むるのみであります。しかも胸中の煩悶は愈増すばかりでありました。

私は私の自身に反省して何故此様に煩悶するであらうか、自分の心理状態の變化は身体上の變化に依る所が多い、精神上の元氣は身体上の元氣に依る所多く、精神上の元氣を養ふには身体上の元氣を奮ふにある、一人室内に籠りて幽鬱に沈まんよりは春の光暖かき青松の下、今を盛りの彼の花影に氣を散し心を養ふに如かずと思ひたち、或は比谷公園の噴水ほとりを逍遙し、或は飛鳥山櫻花の下に杖を曳くも心は晴れず只管歎息ばかりであります。不孝者、意氣地無し、偽善者など云ふ嘲の聲批難のさゝやきを耳にしまするのみで、一の希望あるなく、一の同情あるなく一の慈悲もありません。今更身体の置き所を知らずして淵瀬に身を投じて人の笑となす事もならず、恢復の見込も絶へ失せて如何ともする能はず、唯時を経るに従て此の煩悶も消へ失せるならんと成り行く儘に任するより仕方なしとあきらめんとするも、尙書を讀む氣にもならず煩悶に暮すのでありました。ア、吾が兼ねてから悦んで居た佛陀のお慈悲も今では何の役にも立ちません。御恩廣大と難有く感じて居た古の事も今は何にもなりません。御佛は何れにお在すると求るも得る所はありません。此處に至りて從來の私の宗教は全く破壊せられてしまひました。宗教は慰安の爲でなく、精神修養の爲でない、唯々親様のお慈

悲に氣付かせて頂く事であるとは知つては居ます。けれども御佛の慈悲は少しも有難くはありません、存在も認めません。私はやはり眞の信者ではなかつたのであります。ア、親を欺いた、郷里の先生を欺いた、知己友人を欺いた、ア、悪い事をしたと云ふ情に攻められ良心の呵責に苦しみ、一層煩悶は増すのみであります。今更後悔します事はなまじい宗教などにてさばつた事である。斯の如き事さへなくば、友人を敵と見ても親兄弟を仇に見ても何ぞ苦しみましよう。唯吾身一ツを何ても無きものとさへ思へば、何の苦しむ所がありました。よ。宗教心のなき友の身の上を今更羨む位でありました。

然し今になりて御佛が難有くないとは云へず、又難有いと云へず、此心を打ち明ける友人もなく、此の心を知りぬく人もありません、同情する人もありません、頼る人もありません、寂寥の感に絶へませんでした。佛書を讀んでも何にも感じません、今迄の日記をくり返して見ましても馬鹿らしく、少しも慰みとなるものはありませんでした。日曜日は求道學舎に出て近角先生のお講話を聞きまします何事を云はれるかサツバツ了解できません。唯佛は眞實の親である云ふ事のみをくりかへされるのみである。眞實の親がわかれれば何て苦しみますよや。友人を恨んだり、學校の先生を恨んだり、我が身を恨んだり、不平不満に絶へなかつたのです。何か此の悶情を慰むるものはなしかと圖書室に入りて、種々の書を讀んだ事もあります。新渡戸氏の『隨感錄』大町氏の『處生訓』蘆川氏の『不平の慰安』など數へきれない程精神修養上の書を讀みました。然れども取り得る所は少しもありません、慰安になる所は何

にもありません。然れども嘉納校長『青年學生訓』には非常に愉快に讀みました。言々句々勇氣満ちた言葉、慈悲満ちた言葉が多いので、讀んで行く中に嘉納校長になつたかの感じを得ます、勇氣も出來ます、希望も出來ます。彼の父の如き温情と母の如き微細の點まで心懸け我等が爲に注意を向けて下さる親切と、然も大山崩れると雖も動ぜざる勇氣とを以て教訓して下されてある。其書の内に於て下の如き言葉を未だ耳に覚えて居ます。

梅には梅の季節、櫻には櫻の季節がある如く、其の人の花咲く季節にも早晩の差があるのは疑はない。自から勤めて倦みさへしなかつたならば、何時かは大に英發することは必ずあるものである。春雨之を濕し、陽光之を照らす處に置き換へたならば目ざましき花を開くこともある。

實に勇氣ある言葉である、溫みのある言葉である此等の言葉を讀む中に一週間は愉快でありましたが、しばらくの希望もたちまちに消えます。相變らず不眠に落ち入り感情は高まり、神經は過敏となつて、再び圖書室にとどこもる身分となります。仕方ないから感情の書を多く讀みました。島島氏の『病間錄』非常に興味がありました。光明よりも暗黒を慕ふと云ふ字句ある所にあります。又

自らは自身を空に去るを得べし、心靈を空にさせる能はず。泥んや心靈の根本要求をや、泥んや心の根本要求を積極的に満足せしむることをおや

などの句は此の胸中を刺す思ひがあります。丁度先生の講話で此の室で苦しいなら外の室に入りても苦しい、此れと同じく此の世で苦しいなら、外の世に入りてもやはり苦しい、而も安慰を得るのは此の世限りであると警告されるのと少しも變りません。又『病間錄』にあるものを引きますれば

自分て自分の自由にならぬ此の主観以上空想以上、一種不壞の要來は自覺の中に救済解脱の端は端かに世の始めより置かれたるに候はずや。此の一點をのみ力綱とひとしと取纏り不動の信念を得て無間斷に自觀と參究したまへかし、光明やがて湧き出て候へし。

とあります。されど不動の信念とは如何なるものであるか。若し私にして不動の信念あらば何ぞ今苦まん、不動の信念を有する事を得ざるを以て徒らとは知りながら苦しむものを、網島氏の意見には添ふ事を得ず。然れども又外の點に満足する點もありません。即ち

そも「我れとは何ぞ、この事實の生ずる一種驚絶の意識中には不安あり、恐怖あり、偉大あり、寂寞あり、悲哀あり、不測の空虚あり、不満足あり、歎息あり、而してこれに觸れたるものは既に宗教的生活の第一期に入れるもの也」

と。是れを讀みたる時には一時に光を出したるが如く感じました。梁川氏の如く見神の實驗がしたいとの念がやまなかつたのであります。『寸光録』等の梁川集は全く讀み盡しました。梁川賛成者になりました。梁川崇拜者になりました。されど惜いかな梁川氏既に此の世の人ならず、神の御前に目度き眠りにあるものを、私の此の胸中を述べることも出来ません残念であります。誰か此の胸中を知るものはなきかとの念のみであります。慰安もありませぬ。精神的慰安はなくともせめて肉体胸快樂がほしい。如何なる卑劣なる事、如何なる不正なる事と雖も敢て辭せず。吾れは世に入れられざるもの、又世に入る事を欲せず。吾れには幸福の道は絶へ、希望の光は消へ失せてあります。丁度此の時に書棚に添へてある近角先生の『懺悔録』を開いて見ました。讀み來り讀み至りて

全く私の事を書かれたる様であります。又『人生と信仰』の書も讀み終りました。非常に嬉しかつた。私の不信心自分の怒りの焰は余程やはらぎました。末だ絶對の慰安、大慰安は得ませぬ。其れも御親のお慈悲を認めざるからであります。又自分の自覺もないからであります。即ち私は飽迄人生に望みが無いとは眞に思へない。又絶對に私が惡人とは思へない。又絶對に親様に對して親孝行は出来ぬとは思へなかつたのです。又眞實に自分は此暴惡煩惱の塊であるとは思はなかつたのであります。多少は他日成効しても此の汚名をそゝがねばならぬ、如何にしても會稽の恥をばそゝがんとする奮起心は消したくもありませぬし、又忘れたくもなかつたのです。即ち成功の念も名譽の回復も何もなく。唯眼中親慈悲あるのみとは此の状態には思ふとは出来なかつた、又其の様に思はねばならぬものと思ふて居りましたのです。嗚呼思ふも思はざるも妄念、作るも作らざるも罪体であります。此の心があてにならぬと云ふ事は少しも了解出来なかつたのであります。苦しまして頂くも御親の御恩であります。思はして頂いたのも御恩であります。一つとして自分で出来た事は少しもありません。此御慈悲を知らずして何かと愚痴を申して居ました實に懺悔に絶へませぬ。感謝に絶えませぬ。

三

私は如來様とか佛陀だとか御佛だとか云ふ言葉は全く嫌でありました。私しを此の悲運に落したは如來様だ、私を此の如く苦しませるは宗教であるなど、大いに感情を害して居

りました。然し此の心の奥にはお慈悲が頂きたい、又は大慰安も得たい、御恩廣大なる御恵を受けたい。學校の事もある世間の事もある、種々雑多の事はありますけれども、又色々出て來ますけれども今では何よりも此の御慈悲が頂きたい、其れと云ふも此の心が苦しいからである。最も有底に申せば御慈悲を頂いた上にて成効がしたい。つまり御慈悲をお道具に使用したいと云ふに外ならずと云ふのです。實に先生からはお呵りを受ける事は必然の結果でありますけれども、斯く申すより外に仕方がないから、其通り有ていに先生には訴へました。九段のあの御佛壇の前で此れを訴へ苦しみて訴へたる時には、先生は火鉢を押して私の前に迫られて、今安心せられよと云ふて下さる。眞實の親様眞實の友眞實の慈悲の塊は私が證明する、私と相並びて御親のお慈悲を頂かうぢやありませんかと、熱情溢れたる然も同情に絶へぬ意氣込で云つて下さいました。然れども私はお慈悲だとか如來様だとかを聞きたくありません。唯先生のお聲とか先生の同情のお言葉を聞けば満足します、先生のそばに居ればよいのですと云ふた。然し其れでは先生お承知なされませぬ。翌晩先生のお宅で夜十一時頃まで指向ひてお話を聞きました。其時に私は心の内狀を書いた小冊子をお目にかけた。先生も私と同様に苦みましたが、全く其の通りである。私は先生の後を追ふものである。だから先生の様に大安慰の人となるは今出来るのである。唯永久にお見捨てなき、然も此の胸中、奥深くまで知りぬいて哀れに覺し召して下さる心靈上の親即御佛が居られるから其のお慈悲を頂きたい云はれます。然し私は私に同情して下さる

人は先生があるから大丈夫だと思ひました。心が非常に安靜で冷靜になり、希望も出て愉快して親を得たるが如き感じでありましたと申して寄宿舎に返りました。然し一週間もたてば相變らず苦しい。土曜の講話も拜聴します、日曜講話も聞きます。先生は學校にお出てになつても話される。雜毒の善のお話は先生から呵られる様な心地もします。人生の解釋などのお講話の折りは自分も決定心を得るものならんなどと悦び、姥捨山の例を引いて「奥山にしろ／＼は誰が爲ぞ親の身棄てゝ返る子の爲」との歌は、實に私は其の通りである。親不孝であるとは今始まつた事ではありません、親の御恩は思ひます。私の事を思ふて下さる親があると思へば其れは有難い、けれども此惡い心憎い心を見ぬいて愛して下さるとは思へない。先生に會ふ毎に求道雜誌を戴いて歸ります。中には鈴木龍司氏の告白を見て自分も同様に安心が出来ると云ふ望は出ます、實に感謝します。同氏のお言葉の様に私は絶對に他を愛したいのです。友人が病氣などの折には何事も打忘れたいとの念は起ります。私は友人に對して距て心を作る事は嫌ひであります。何事でも隠す事は嫌ひであります。心のありたけを披露して肝膽相照して相交るのが私の持前であります。一心同体になりて交際し相携へて奮勵したいのです。然るに今は絶對に他を愛する事は出来ません、狐疑心を懷き、吾が心をつゝまんとす。而して私の胸中は冷やかて友情などは少しもありませぬ。然し或る者からは絶對に愛せられたいのです、絶對に愛せられたしとの要求があります。私の此の苦

しんで居るのを見ぬいて朝夕共に食し、共に學び、共に働き、共に慰めて呉れて私の過去も引き受け、現在の保護者ともなり、又將來の指南者ともなつて呉れる人が欲しいのであります。尤も友人は非常に私を慰めて呉れます。過去は過去に葬りて現在に生活したまへ、又將來の事を思ふは取越苦勞に過んのだから其んな事は氣に掛けずに新生命に入り給へ、何人も人の笑ふが如き罪惡を犯したにもあらず、不道徳に落ちて墮落したと云ふにあらず、氣を大きくして奮勵したまへ、嘉納校長のお弟子ぢやないかと、慰めて呉れます。そんな風では成功は出来ない、大人物になれぬ、小さき事は考へず何も彼も僕に委せよと云ふて呉れます。然し僕は大人物になりたくはない、唯安心すればいいのだ、又僕は君の云ふが如く新生命には入りたい、然し夫れよりも自分は絶対に他より同情せられたい、愛せられたい、君の好意は謝すけれども、君以上に絶対に同情して呉れる人が欲しいのである。又他の友人は種々と慰めて、自分の苦んだ事を例に示し、僕の心情に同情はする、然し其れは薪に火をつけると同様である、其れを消し止める程の勇氣はないか。心の苦しみは自然に委せよ、世の中の成り行きは自然に委せよと慰めて呉れます。然し僕は耻しながら其の勇氣はない、又自然に委せる程に此の心は安靜ではない。先生を頼むにしても先生は同じ事を何度も申される様で、然も其の理屈は知りぬいて居ります、聞いて居ります。先生の『信仰の餘瀝』を読んで身を責められるのみであります。世の中は心にも無き懺悔の涙を出して人を欺むかんとするものがあると、其れは私の事でもあります。又は所謂信仰家と云ふ者は

眞の内心も備へずして、内剛なる眞似を爲して、然も外柔ならんとするものである、内柔にして其の上に相加へて外も柔である、豆腐の如き人物が出来ると、實に此れは私の事でもあります。苦しい胸を抱きて『信仰の餘瀝』を抱いて圖書室で一人でボンヤリとし十二時頃まで過した事もあります。云ひ知らぬ悲哀の情は胸にふさがりてドウしても安ずる事が出来ません。人が悪いと絶対に云ふ事も出来ず、自分が眞實悪いとして満足する事も出来ません。渦中の内てクル／＼廻つて居る様であります。私の立場は無論見出せず、室員に對してもすまない様な氣もします。此まゝ安心せなかつたならばどうなる事が判からぬと思ふた。然し此の如き者が可哀い相だ此の如き決定心なき私を同情して下さる、慈悲の涙を以て見て下さるとお念佛をチョット稱へては見ますけれども、安心はなりません。佛あり聖經あり何ぞ心を安んぜざるの先生の言葉が思ひ起されます。そして私の苦しい事も悪い事も何もかも、私の一切今迄の事を知りぬいて下されて、然して其れでよいかから此方に向けと同情して下さるのに、私は何故に眞實打ちあける事が出来ないのであらうか。又は人生上の苦惱も思ひ起します。僕は友人等には此れだけの眞實を盡して居る、又僕は友人知人他人を絶対に愛して居る、然るに彼れは何故に僕に同情を寄せぬか、何故に彼れは僕の様に情が濃かたないのか、僕が如此き心になつたのを飽いたのか。僕は多少人を敬して居ました。絶対に云ふ程でもなくとも人を信用し人を誠あるものと思つた。僕は他人を自分と同等の眞實あるものと思ふた。然し人はさすがに人である、今迄は私は人の心などは

知り盡せなかつたのであります。此れからは私は人を輕蔑します、人を相手には致しませぬ、人を尊敬などは致しませぬ。

然し僕が之程思ふて居るのに、彼れには通じなかつたのかと云ふ不平は、此れは相手にもよりましよう。人間は實に五分五分のものであります。人間としては互に絶対に同情すると云ふ事は出来ませんものを、一方が落つれば一方は進んだのを悦んだのは當然の事でありましよう。人間は我利の塊でありますものを、自分さへよければ人の利益を顧みないと云ふのは人間の奥底に隠したる持前であります。人に親切を爲したり、人に同情を寄せたいと思ひ、他人の面倒を見てやるのは他日の己れの利害に關するからであります。他日自分が榮進する時に杖とも柱ともせんが爲であります。然も一度其友が落ち又遠く距たならば、見向きもしない。私が要求するが如き眞實の誠はありません。此れが人間の根性であります。人を恨むと共に我が身も恨みなくなるものです。雜毒の善、虚假の行であります。人間相手としては一も眞實なる事はありません、一も誠なる事はありません。唯萬古不變らざる慈悲の心を持つて私を守て下さるのは此の御親の心より外にはありません。此の慥かな此の明確なる眞實に救はれたる私ほど幸福なものはあません、毎日感謝の日送りを致します。懺悔の日暮らしを致します。

四

國の父から手紙が少しも來させぬ、學資金が來させぬ、時々

兄から烈しき手紙が参ります。信後とても失敗は多くあるものの、假令失敗するにしても、失敗をせざるにしても病氣にせよ、病氣でないにせよ、御親を忘れたにせよ、御親を思はぬにせよ、又御親が難有くない様になつても、吾等が眞實の親様とお慈悲は少しもお變りはない。唯此の泣く子が可愛い、苦しむ子が哀れだと思つて下さるのである、此の大丈夫の御親の同情がかかるのに何て苦しむか。人間のありませぬ自力根性を出して自から戦はんとしても駄目である、半自力半他力て何事が出来る、一切は御親のお心にある事だから、決して苦しむ事はいらぬ。無明長夜の燈炬なり、智眼くらしと悲しむな、生死大海の船筏なり罪障重しと歎けかざれと書き送つて來ます。其の心地が丁度先生から謂はれてある通りの適切なる事を遠く三百里の九州から書いて來ます。能くも此の如く私の心が知れる事と耻しくもあり、恐しくもあり、懐かしくもあります。兄には眞實の信仰があるか否かは私には了解出来ませんけれども、求道學舎でお話しになる例へに出るのも此の兄の事てあります。生死の苦海ほとり無し、久しく沈つめる我等をば、彌陀弘誓の舟のみぞ、乗せて必ず渡しけると云ふ御和讃を戴いて信仰に入つたのは此兄であります。私は世俗の人には遇いたくもありませぬけれども信仰家が戀しい、近角先生は慥かに信仰があるからと思ふて先生を餘程たよりに致しまして、先生の慈悲のみとていて大事な絶対のお慈悲は届きません。『親鸞聖人の信仰』をも讀みましたが、佛は眞實の友であると申されて居るのみで、他は何事が書いてあるかサツバリ判りません。私は他を愛する事も全く出來ず、又他より

愛さる事も全く出来ません、絶體絶命であります。出離の縁がないとは此の事であると思ひます。死と云ふ文字は度々私の胸中に書かれます。房州の北條に海水浴に行くと思ふて見たり日光避暑に行こうと思ふて見たり、胸中は色々の計畫が起ります。然れども幸なるかな、梁川氏の言葉や先生の警めの言葉が身にしみ居ますもの故幸色々の計畫は崩れます。學校は欠席して郷里の友の下宿屋に逃げ込んで行きました。學期試験はあるけれども其のさわざてはありません。友は毎日愉快相に學校に行きます。僕は學校からは棄られたんだ。友には友人が遊びに来ます、僕には友人は無い。友には郷里からやさしき手紙が來ます、僕は郷里の先生からも親からも棄てられた。僕は全く世の中からは棄られたと無言で苦しみます。食事に進まず食ふ可きものに味はない、又食いたいと思ふものがありませぬ。酒は嫌ひ煙草も飲まず、樂器は生來好きないでもスグに飽きが來ます、何一つとして楽しみはありません、身体は衰へて盡の間でも發汗する程であります。故郷の兄からは度々手紙が來ました、非常に私に氣の叶つた文字もあります、又私の胸を刺す恐しき文句もあります。父上は元氣にして居られる、お前の休暇で返るのを非常に待ち居られる。家族の者皆揃つて歸國を待つて、敏子までが指折り數へて居る、是非早く返て来い、兄弟に遠慮が居るものか、血を別けた兄弟だもの、誰が何と云ふとも父は父、兄は兄だ、お前が知る通り自分もお前と同様の苦を見たるもの、同情するよ、國に返つて一生懸命遊んで見給へ、神經衰弱は直ちによくなり、先生の夏の講話聞いてもよいが、一日も早く自分

に安心させよと云ふて來ます。あゝ郷里には何の面目がありて返られよう。されど父上も心配せられて居らるゝ事ならん、又能く私の心を知りぬいて居る様に見へる、兄の所に行つて見たいと云ふ念が一時に起りてやみませぬ。又此頃は先生は京都にお出である、京都まで先生を慕て行きたい、身を捨て、道を求むるとは此の事でありましょう。早く先生の所に行きたい今一度講話が聞きたいとの念がやみません。友も勧めますから、蒼惶荷物をととのへて新橋を出立しました。汽車中の苦しかつたことはたとへようもありません。然し京都で先生に遇へると云ふ望みが大きいのです。七條ステーションに着した時は飛んで本願寺に行きました。廣き庭で僧衣の人を求め、或は先生にあらずやと求めて色々の人に尋ねました。先生は會議に出席ありて或は東京に歸へられたかも知れんと聞いたときには身振ひしました。眞宗中學に尋ね、佛教大學に尋ね、西本願寺に尋ね、遂に求むることを得ずして、痛き頭を抑へて再び七條ステーションに歸つた時の苦しかつた事は話しになりません。東本願寺に始めて入りたる時には御堂には頭を振向きもしなかつた。人に顔を合はせることが嫌やであります。唯胸中には天にも地にも近角先生一人でありました。然し絶望の極再び汽車に身を投じて國に出立しました。京都より大阪に至る間に一人の高貴なる僧侶にあひました。意見を叩かんと私の秘密の小冊子を開けて訴へて見ました。即ち私は此の様な感を懷いて居ります。人生の事は何か幸福だやら、何が不幸だやら、又如何にすれば吾が都合に宜しきやら、惡しかりしや、何れの道を辿つてよきやら、

左へも右へも前へも後へも進むべき道がない、つまり私には全く常識が無き爲に何れに行ても失敗する計り。此處に於てか凡てのことを知り盡し、我が善惡を知り盡し、我が咎過を知り盡し、我が心中を知り盡し、前途の明を知り盡し、我れに教を給ふ友ありとせんか、其時には直に其友が一切を見、又私は一切を委したい。されど此の友は親にも兄弟にも又は親友にも求むることが得ず。假りに如來様を信ずるとせしが、自分の進退が如何に所置されるかを知らずと、小冊子にあることを見せました。然るに此の僧侶は大いに私に同情せられました。然し汝の考へは根本から誤つて居る、今の青年は他に頼らんとする傾向あり、自力でやるべし、此自力を棄て何事かを出来ようぞ、如來様は此の私の胸中にあり、口に南無阿彌陀佛を稱ふ、此れ我が口にて稱ふるのである、心に佛を念ずるのは即ち我が心で佛を作るのである、一切他力とは理解できざる所である、私は眞言宗の僧侶であります。日本國中至る所に演舌して居ります、まづ汝の根本問題を考へたがよからうとの長さ長き演舌を聞かれました。あゝ吾れ誤まつて、吾れは全く誤解して居つた、私は此だけの自力がある、何て此の自力でやらなかつた、何て無力の意久地なしとなつたか。呼鳴余は他力眞宗の教を欺かれた。近角先生を命の親と頼りにして居たが、近角先生の教は間違つて居るんだと思つた。其の刹那私の身體私の心は如何になつて行くか少しも覺えませぬ。私には頼みはないとは云ふものゝ唯一つの頼みはありました。夫れは天にも地にも近角先生一人は私の親である、先生のお言葉は私には徹低せん事はないと、此れに

て安心せられるものとの唯一つ望みがありません。然し此の望の網は全く永久に斬られてしまつた。先生が頼りにならぬならば、郷里の先生は無論の事、郷里の兄も勿論の事である。あゝ長さ／＼嘆息をもらすのみ、其の時の苦しみは想像も出来ません。御經驗のある信友諸君の御諒察を願ふのみであります。

自力根生で出来るなら何て此の様に苦しみましよう。始めから實業の日本社の説で實行されて行つたのです。新渡戸校長や嘉納校長の勇往實進主義でやつて行けたのであります。此が出来ないからこそ人を恨み身を恨むものであります。出来ないことを出来よと命する實に残酷の極である。苦しかろう悲しかろう實に滿腔の熱情を以て同情すると云はれて始めて元氣が出るものを、藤村操が煩悶の折りに、此れてはならぬとフランクリンの言行録を實行したとあるが、嘸や苦しかつたてしよう。理性に満ちた言行録を讀むのは、しおれたる苗を引き上げて助長させるものであります。苗の求る所は生長せんとを願ふものではありませんが、地に充分の肥料を得、暖き光りと充分の雨水を得るの願ひであります。其肥料ともなり、其雨水ともなりて吾等を養て下さるものは唯此のお慈悲より外にはありません。お慈悲なくば今頃は死んだかも知れませんが、幸なるかと思ふ度毎にくり返して感謝します。私が此の告白を書くも此れお慈悲の御命令であります。何を爲すのも御命令であります。身も心もお慈悲に融かされたる私であります。

苦しかつた私も如何ともするとも出来ません。汽車の走るまゝに委せて唯牛乳ののどをうるほして國に返りました。懐かし郷里と思ひ、戀しき郷里と思つたは去年の夏のみ、今は恨めしき郷里口惜しき郷里であります。昨年誓つた郷里の友は、郷里の知人は、郷里の戀しき人は自分を嘲の笑で迎へて居るであらう。何に吾輩は高等師範學校の生徒だ、本年満二十二歳だ、元氣盛りだ、此しきの事に何で苦しまん、此の腕を見よ、此の顔骨を見よ、古武士の傳は此處にあるんだと思つて見ても、瘦我慢の元氣に過ぎません。磯吹く嵐に散る波路程にも持ちこたへはありません。たちまち消へてたちまち砕くもろきは此の心かなであります。郷里の大隈驛にはつきました。私の目から信仰のあるらしく見へたる兄が驛に迎へに來て居ります。父上にはお前のとは何にも申してないから安心せよと云はれた。其の時には苦しみ中にも胸なで下しました。其れなら其れと何故早く通知して下さらなかつた。其れの爲に如何程悶へたか知れぬ。然し幸であつた。故里の先生は待つて居られる相である。然し御面會したくは無い、全く行かないと云ひはつた。然し兄は信仰の友は其の様なものではない、苦みが多かる程同情を寄するものは信仰である。お前の事を非常に心配せられてある、又一方ではお前の其懺悔の苦みを非常に悦んで居られる。先生に行つてお話を聞いたら、病氣も直によくなる、一所に行かふと家の戸口に入るまでは此れにて就つて居られた。私は郷里の先生には如何にしても遇いたくはない、世界の中で一番恐しいのは此の先生である。先生にお呵を受けるのは嫌やた、私は家族の者は皆鬼の様に見へ

る、然るに兄だけは味方になつて呉れると思ふた。其時父上は何と云はれたか覺えませんが、病院に行けとか轉地に行くがよいと云はれた位は覺へて居ます。何時學校を卒業するか、自分も老體になつたから、早く卒業して呉れと云はれた。其れは私にはあまりに酷な御言葉であります。私の此の胸中は御存じない。あゝ濟みませんと云ふ心も哀れに動くばかりであります。

翌日は兄と二人で母の墓前に參詣しました。唯二人きり思ふことを腹一杯に話しました。私の秘密の小冊子を兄に開いて見せた。秘密と云つても私の愚痴を書いたに過ぎません。今では秘密ぢやありません、此れを後から讀むと非常に興味があります。お慈悲の強きことが明に知れます。御耻かしい次第ですけれども萬一同胞の御參考にもならうかと、その中私の最も苦しんだ點を書き記してみよう。

私は宗教は理想であつた、又感情であつた、實驗的でなく名利の爲であつた。宗教をお道具に使用した。現在に非常なる狐疑心のみにて、一舉一動已れを飾りて人より能く思はれんとす。先生に密問して其の後の萬事を發表されん事を非常に恐る。○自分の神聖なるに非常に苦しむ。宗教の爲に苦悶することゝ好まず。宗教はむしろ現在に好まず、但し諸君の熱情を以て同情せらるゝ人、外へは先生にして一般の方針の保護者となつて戴きたい。

○道徳的に非常に身の罪惡を苦しむ。親をあざむく、先生をあざむく、友人をあざむく。體に惡しと思へども人の罪惡とは、比較す。過去を忘るゝことを得ず、將來に安んずることを得ず。○實際に眞實に考ふれば自分は眞正直なるもの、されど常識に乏し。今より思へば世間の萬事、親、兄弟、師、知友全てより欺かれたり、斯の如き悲運に落されたり。○自分の罪惡と云ふは師にも告げ、友人にも告げ、此れにて足れりと思ひたり。罪惡とは思はざりき、他人の不正は能く目につくも自分の不正は斯くまでとは思はざりき。○自分

の歸己に二十才青年の危期此れより過ぎたるはなし。あゝ危きかな現不孝はしたくなし、兄弟知人に不實の行爲はなしたくなし。むしろ忠實ならんとするも出来ず。○地底の影暗く、世の塵を遠かつて安慰せる彼の白骨の安らかなる眠りを羨む、重盛が熊野瀧現に死を祈つた、自分は祈りはせざれど病氣となつた倒れたい。○先生に面會したきは最も慰安とする所。然しお慈悲を説きつけられるのが最も苦し。お慈悲に氣付かなければ何程の時日を經るとも駄目であるが、自から欺きて氣付きたいと思はず。むしろお慈悲を大いに攻撃して見たし。○自分の心は豆粒の如きである。小心翼翼として學術尙進まず、唯頭腦を惡くするのみ。小なる心を隠さん爲に虚言をも吐かざるを得ず、不正なる行爲もなざるを得ず。唯我愛して浮世を渡らんとす。危きこと甚だしきにあらずや。一步誤れば他人の信用を害し、一步違へば他人の惡感情を招く、自ら此れを知りつゝも正すことを得ず、自から恥ぢつゝも自から欺く、自ら欺きて此を人に及ぼす、終には身の破滅となる、甚しき危期にあらずや。○自分の今迄の修養は表面的である、虚榮的修養に過ぎず、偽善に過ぎず、他人の潔白を見ては羨ましき限りである。自分には斯の如き惡習慣ありと思はざりき。

○宗教を信じたるが爲に現代の策略手段を用ひず、外面的の成功を賴ず、此れ最も善が好まざる所。宗教を信じたる人は社會と離れたるが如き態度を爲す、之れ最も好まず。世の中にある最大幸福を望む、されど西行法師となるよりも、苦戰して豊臣秀吉たらんことを望む。○宗教に依つて心の救はるゝのは古聖賢のみにあらず、吾れとて救はれざるを得ず、されど吾れには此の我觀念強し、名譽を損ずることを好まず、人より敗れたくなし、親より惡しく思はれたくなし、知人友人よりは貧められたし。○宗教に入る人は人世上眞面目になりて來て、其の智の限りを盡して人世の意義を不可解と叫びて、遂に如來を信するに至る。然るに自分の此の入信の研究は苦しみが取りたい、精神修養がしたい爲に外ならず。○自分には人生と云ふものを眞面目に考へるに足る程の實驗もなく、經驗もなく、思慮もなし。又此れを研究するだけの動機を有せず、人世を七分三分に送る人あり、人々我も我なり。惡しきことも平氣でなしきれず之れ自分のことではあるまいか、○現今の青年は煩悶するだけ其れだけ眞面目であると云ふ人もあり。されど自分は人生上に於ける眞

面目の爲に煩悶するにあらず。○自分は斯くすれば斯の如き結果となる。此の結果が又其の結果を生むものと豫想せし理想が全く破壊せり。必ずしも親に心配かけようとは思はなかつた。宗教を遠け又策略を弄したりすれども、窮する所は信仰に心が向きて、煩悶を去り、安靜の身となり、感謝の身となりたし。心の終極は信仰を求めたし。○無限の能力とは想像することは出来ざれども、如何に樂しからん、如何に大膽ならん、如何に平安ならん。○力なく智なく苦しみ多きもの、煩悶者である愚者である、弱者である。此の者に御親は哀れみ思召さるゝ、あゝ如來の救済が欲しい。○信念の幸福は現在に於ける最大なる幸福なりと。毎日毎夜苦痛煩悶があるから之れを縁として毎日毎夜此の幸福を實驗さして下さる。世間的の順境にある時よりも、逆境にある時の方が一層直接に信仰の難有い事が味はるゝと斯の如き信仰が欲しい。○順境に居る時には親に對して不孝なることを爲さんとと思はず、兄弟に對し又、朋友に對し知人に對し、師に對して不信なることを爲さんとと思はざりき。然るに逆境に居ては惡しきこととは知りながら、師を恨み友人を憎み人を欺き常に周圍に遠かる、倫理道徳は自分に於ては逆境の場合には行ふことを得ず。此も自分が薄志弱行の然らしむる所である。○「無限大悲の如來を信ずる事に依て今日の安樂と平穩とを得て居る」と此の信仰家に會いたい。

○自分の苦痛は義務を全ふすることが出来ぬ、即ち品性下劣であつた爲である、倫理上の苦しみてある。倫理道徳で苦められて死ねるか又は逃げるか又は倫理を守つた振りをするか。然し此れを守つた振りは自分には最早出来ぬ、何となれば此れが爲に苦しむものな。○自分の身體は親の賜である、自分の學問は師の賜である、自分の生活は社會の賜である、すべて此れ他の恩寵であることは知れども、此れが爲に自個を忘却してはならぬと思ふ、又自分から出來得るだけの自力は忘れてはならぬと思ふ、自分の爲すこと、行ふこと、學ぶ事全く此如來の賜であると思ふことは出来ぬ。○世の中の人々は煩悶する苦惱すると云ふのは、凡て人生上の感情の衝突より起るものと思ふ。然るに世の修養訓育訓志訓などとは全て感情を離れて理性的の教訓たるもののみである感情を離れて理性的の教訓のみである。理性に勝る人ならば煩悶せず苦惱する事無し。此處に於て感情の方面より此の煩悶苦惱を慰せんとするものは唯此の宗教あるのみと思ふ。自分の如き感情に左右せらるゝものは、宗教

に依て安慰を得るより外に道なし。近角先生の教へが了解出来ずば、學校は退校して自暴自棄に陥るより外に仕方なし。

六

已上は煩悶中の私の感想であります。母の墓前では悲哀の感が多かつた。兄は此の冊子を見て内心ひそかに嬉んでる模様である。けれども私は心は開けず、相變らず身に余る重荷を負ひて峻峰に登るが如き感じ、又は足下を拂はれて谷底深く沈むが如き感にて、四面皆暗黒であります。恐ろしかつたけれども先生の前に出た、近角先生と同じ事より外謂はれぬ、否より以上に激烈の状態である。我等が苦しめば世間の人は其の位で苦しむのは小人物であると云ふ位で多くは振り向きもしない。然し信仰の友は佛心を以て吾が心とするから絶対に愛する事が出来る、絶対に同情する事が出来る。先生も同じ苦しみを爲された、私も同じ苦しみをした、兄さんも同じ苦しみをした。故に其の苦しみを想像するに充分に出来る。先生は今でも私等の事を心配されて居られる。それと同時に私等の親は此の苦しいものを殊に哀れに思ふて居られます。若し今安心したと先生に申して御覽、それこそ先生は小躍りして悦ばれる。同様に私等の親は涙を流して悦んで下さいます。其の安心は今です、現在です、同一に念佛して別の道なきが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内皆な兄弟ですぞ。同じ親を頂くんですもの、然も未來永劫の兄弟ですもの。身の不正に苦しまれるとも私程親に不孝なものはありませぬ、親を罵た事は幾度か知れず、然し苦しむと云ふのは名譽を命とし、置

位を我が命とし、妻子を頼りとするから苦しむものです。あてにならぬものをあてにするからこそ苦しむのです。其の様な者を持つて居ては身の障となる、其の様な眞實でないものに迷て居ては身の傷となる。幼子が小刀を有て居ては危険だから棄てよ、其れよりも眞實なる丈夫なる同情深き此の菓子を取れと云ふて下さるのです。危険とは知りつゝも放さないのが私等の根生、然し危険である事は鏡にかけて見せて下さるぢやありませんか、學資の事を心配したり、家庭の事を心配したり、學生として必要な事を考へてはならぬ、 unnecessaryな事を思ふて居るから成績が悪くなる。其れよりも此の親心を頂きなさいと云はれる。あゝ其の御言葉は其の喻はあまりに酷であります、あまりに的中し過ぎる。此れだからこそ先生が恐しいものを、此の胸の心臓を鋭利なる短刀にて刺されたるよりもひどい、肺肝に向つてピストルを放たれたるよりもひどい。私は何にも此の口から一言も出ない。唯私の小冊子を開いてお目にかける計り、私の寄る邊は髪の毛ほども見出しません。東京では先生が頼りにならず、歸れば先生が又頼りにならず、兄は先生の方に味方して居るのみならず、兄までも時々口を出す。お前が親に濟まんと言ふて居るけれども、親孝行の唯一方法は御信心頂けば何もかも片付く。何れに行つても慈悲からは逃げる事は出来ん、今でもよい今夜でもよい、入信する事は出来る、然し私の力では如何にする事も出来ません。頭が非常に悪くなつたと云へば、其れが良くなるのであると云ふ。親の存在は認めんと云へばお前の目で認める事が出来ないと言ふし、私は實際に良心の呵責に苦しんで

居ると云へば、其んな良心など立派な心がお前の心にあるものかと斬り込んで来る。私は身心的活動法で以て大に修養した方がよいと思ふ、如來様など頂く事は大嫌いと云へば、精神修養するもよい、常識の修養もするがよし、出来るなら實行するがよい、お前の其の様な頭をかくへて何が出来るか。然し如來様はお前が嫌つても嫌はいても如來様はお前好いて居られる、お前を一番可愛相と眺めてお出になる、其が知れんかなと歎息する。如何に議論しても何等の手にこたへるものはありません。得る所はありません。

先生は近々に東京にお出になる由だから、今一度東京に行つて聞きたいと思ふた。先生も賛成の模様、兄も賛成の模様、けれども父上は大不賛成であります。今三百里も歸つて來て居ながら再び東京に遣るのは不賛成らしい。其れよりも湯治に行けと命ぜらる。何處までも親に心配をかけます。親の命に従て兄と二人で湯治に行く事に決めました。場所は豊後の別府、時は七月四日、二週間程静養しました。其の間に慈悲が有難いと云ふて兄を悦ばせた事もあります。慈悲が消えたと言ふて兄を怒らせた事もあります。私は御信心は消えたと言へば、親様の御信心をお前が消す事が出来るか、お前は先生に依て御信心を得たいと思ふて居る、又求道雜誌や御聖教で御信心を得たいと思ふて居る。其れは大なる誤りである。親様に直接にお信心を頂け、其れが最も大丈夫だ、人間相手は何もならぬと云はれます。親様が知れてからは何んて苦しまん、親様が目付つたら御信心は入らぬものを、あまり口が悪いと思ひました。明治四十四年七月十八日同宿の保養

客と夜遅くまで話しました。此の人は半身不隨の足の立たぬ病人であります。然も四五日以前よりして慈悲が身にしみて嬉しいと悦んで居られます。私は其の心中が羨ましかつた。話が進んで私は色々の問題を出しました。世の中の人は何で安氣でしよか、名譽も思はず、義理も思はず、平氣で悪い事をすると言へば、答へて世の中には人間の程度があります。人と違つて私等は親の事も思ふ、名譽をも思ふ、置位も思ふ、其れだからこそ神経衰弱になります。犬か猫かならば此の様の病氣はありません。私も此れて非常に苦しみました、其れが爲に神経痛を病んで居ります。然し今では非常にお慈悲が有難くて懺悔して居りますと衷心御慈悲に對して稱名念佛して居られます。其の心中の平穩、其の胸中の悦びは驚くばかりであります。私は云ふた。私は身体は此の如く丈夫でありますけれども、心に病があります。身体に病のある客人は心は平安であります、私は羨ましいです、身体は病氣があつても敢へて辭せず、然し心の苦しみに堪ゆる事が出来ませんと訴へました。然し客人は大事な此のお慈悲でさへ病氣の爲に悦べん事もあります、其は已むを得ないであります、此の様な悦べん者であります、淺ましいものであります。と申しました。其の夜は相變らず眠れませんでした。二十四日よりは無漏田先生の所に行かねばならぬ、其れもつらい、逃げる方法はないかと思ふて居りました。ツクツク思ひました、病氣の爲に悦べんから講話は辭すとおことはりしよう。自分は此の神経衰弱の爲に悦べないから如何ともする事が出来んと、一人かの客人のお言葉を繰返して居ました。悦べないのは私の生分、

悦べない。●は今始まつた事ぢやないではないか、神經衰弱ではないか。此の刹那「斯の如き病人に云ふて聞かせて居るぢやないか」との大聲胸中に轟きました。腹の底より頭の頂上に何だか虫が飛び出した様に悦びの情はあふれ出て、止めんとするも止める事を得ず、抑へんとするも抑ゆる事を得ず、考へんとするも考へるまでの餘地を存せず、善も惡も其の場合考ふる隙がなかつた。謂ふ事も出来ず、包む事をも出来ず、あゝ親様は斯くまでも私の胸中を知りぬいて下さつたか。然も此の最も苦しい點までも突きとめて下さつたか、其れ迄に其れ程に私を思ふて居て下さつたか、苦しみを覚えて置いて、先生に遇はせて下さつた。此れで行かぬならば此の書此の告白を見よ。其れでも行かぬならば郷里に歸れ、郷里には先生も居られる、兄も居られる、そしたら此の心が届くかも知れん、其れでも氣付かないならば湯治に行け、此心に計畫はある思慮はある、此の心を届けずしてはやまじ、吾が此の心を今氣付て呉れたか、此の親の心が了解できたか、親ぢやもの、子ぢやもの、悦ばいて居られよう、此れが親子の對面と云ふものだ。安心せよ。安慰せよ。誰が何と云つても、誰が何と迫害しようとも、誰が如何に見捨て様とも、此の眞實の此の眞實の確かなる親は此の子を捨てはせぬ。苦しい時も一所に苦しむ、死んで行く時も一所に死んで行く、永劫變らぬ親ぢやないか、光の至る所法喜を得とぞ述べ給ふ、大安慰を歸命せよ、一時の安心ぢやない、半年か一年の安心ぢやない、未來永劫の安心である。今からは決して苦しむ必要はない、悦べ、今迄どんなに苦しんだか。四五六七月まで半歳以上此の顔に笑

ひをもらした事は未だない、苦しかつた、恐ろしかつた。京都で先生を求むる事が出来なかつた時にどんなに苦んだか、死と云ふ文字が此小き頭に幾度畫がかれたか。二十有餘年の苦しみ二十有餘年の罪一時に今消されるにあらずや、否、否、久遠劫來の迷ひの網を今や斷ち切て下されたのです。如來の願船居まさずば、苦海をいかでか渡るべき。餘りに悦んだ爲めに神經が逆比例に神經過敏に悦びます。心臓の鼓動がはげしく今にも破裂せぬかとあやしんだ位であります。私は、此僕は超世の悲願さしより、吾等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土に遊んで居る。今死んでも決して殘念とは思はぬ。又地獄などに落ち様とは無論思はぬ。幸に御和讃を思ひ出したる事でもあるから、此れから起き出て、御聖教を頂きましよう。お稱名と共に起きて眞宗聖典を取り出し、電燈の光りて思ふ存分に御和讃を讀まして頂きました。新聞の字さへ讀めない様になつて居た此目が、御和讃は能く讀めます。前日まで電氣療法を行つて居ましたが、御和讃を頂く時には丁度電氣療法を行ふ時の心地でありました。何事が書いてあるか了解出来ない所も多かつたけれども、大底は意味が了解出来ます。最後に至つて「金剛堅固の信心は、佛の相續より起る、他力の方便なくしては、如何でか決定心を得ん」との句に至りましてはよくも云ふてあります。私が相續するにあらずして、御親の方から相續されるのです。私が御親を見るにあらずして御親が私を守つて下さいます。お念佛稱ふるも可なり稱へざるも可なり、思ふも可なり思はざるも可なり、御信心を私が持つも可なり、持たざるも可なり、私と云ふものに御信

心があるべきはづはないのです。此の腹の中に御信心と云ふ不思議の芽が今出来たのであります。『歎異抄』も頂きました。丁度此中に書いてあります「よろこぶべき心を抑へて悦ばせざるは煩惱の所爲なり、しかるに佛兼てしるしめして煩惱具足の凡夫とあはせられたるとなれば、他力の悲願は斯の如きの吾等が爲なりけりと知られて、いよくたのしくおぼゆるなり」とあります。又其次が難有いのです。『踊躍歡喜のこゝろもあり急ぎ淨土へ参りたく候はんには煩惱のなきやらんとあやしき候らひなましと云々』踊躍歡喜の心があつてたまるものか、其様な立派の人間ならば佛だ、御親の御苦勞は入らないんだ。御親の御苦勞は抑誰の爲だ。此悦ばん奴が可哀相だからであります。胸を抱いたり頭を掴つたり手を組んで見たり武者振りして見たりして居る中に、下女が起き出て、竈の火をたきかけて居ます。鶏が鳴きます。磯馴れ松の風の音が聞えます。汽船の出帆の笛が元氣よく空に渡ります。雨戸の外を見れば東は白んで空には明星がキラ／＼と輝いて居ります。あゝ世は意味あるかな世は意味あるかな。太陽は東に出て、西に隠る、月は晝は休んで夜は照す。草木は陽光を受けて大氣を吸ふ、放つ蒸氣は雲となり雨となり谷川の水となる。而して大海の怒濤となる。一つとして意味なきはなし、一つとして矛盾する所なし。此の世の中は斯る解す可き斯る因果の現明なるものを、誰か云ふ曰く不可解と。不可解をして可解とせしめられ、大なる悲觀をして大なる樂觀と爲さしめらる、實に幸福なるは此の私であります。感謝します、無常の世の中に常住の親の光を認めて生活させて頂くものを。

兄は熟睡して居ります。何か夢を見て居るだらう、早く起きればよいな。この事を話して聞かせようか聞かせまいか、云ほうか云ふまいか。聞いたら嘸兄も悦ぶだらう。そしたら直ちに郷里の先生に知らせるかも知れん。先生も悦ばれるに相違ない。そしたら又東京の先生に通知せられる。そしたら先生も悦ばれる。然し誰よりも一番悦んで下さるのは此の心靈上の親である。此の親様は人は知らんけれども斯く迄に明確なものである、斯程に慥かなものである、此の様に明らかなるものである、此の様に眞實なるものである、此の様に慈悲の情熱さものである。友人間の同情だとか、世間底の親切だとか、異性間の愛情と云ふも、皆な雜毒の善であります。我利の要求があつての事であります。此の要求が全て身を殺すものであります。僕と君とは親友だとか、一生苦樂を共にするとか、何處から其の様の聲が出たか。其の聲が我利の爲とは知らざるか。けがれたる要求ではないか。ささざまに一人考へて居る中に兄は何にも知らんて起き出ました。食事の時に昨夜は嬉しくて休めなかつたと告げ、金剛堅固の信心は、佛の相續より起るでありますと申したら非常に悦びました。茶碗を置いて今迄は苦しかつたと、二人とも長き安堵の歎息をいたします。家族の人々も悦びて下さるだらう。欽喜雀躍手の舞ひ足の歩む所も知らず有頂天であります。直ちに紀念寫眞を取りました。當日は汽車開通で別府町は祝賀會であります。誰の爲めの祝賀會か。然も十八日は前住上人の御忌日十九日は母の命日であります。汽車を走らせて歸途に付きました。宇佐八幡宮に二人で參詣し、次で少尉の兄の家に行きました。私

は一人悦びます。此の悦びは人は知らん、知らん人は可哀相だと思ひました。後に兄と二人で話す事が非常に面白いです。昨夜は自分は非常に力を盡して前に云つて聞かした、そして前はよく聞いて呉れた、今迄にない嬉しかつた、其れは夢であつたと。又夢物語があります。兄が入信する前には御開山聖人と叡山に登って散歩する夢を見たと言ひます。同様の経験が私にはあります。東京で苦しい時近角先生と共に散歩して、靖國神社で先生の手を取つて真に如來様と云ふ人がありますかと云ふたら、先生は手を抓て事實にありますが。其の爲に私等安氣に日暮しが出来ると云はれたる夢を見た事もあります。

未だ書きたい事が多くあります。あまり長いと躊躇しますけれども、長くてもよろしいとの先生のお許しであります。又まだ書かねばならぬ事があります。其れは此の入信の場合には文句に出て居る様に嬉しかつたばかりで、頭が高くなり宇宙を呑んだ様な心地でありました。英勇になつた様な心地がして眞の罪惡感此の後に於て起りました。其を書かして頂きます。そして悦びの状態を今少し書かして頂きます。

七

私は偉い事を云ふて見たり勇ましい事を云ふて見たりすれどもやはり凡夫であります。一生造惡の惡人であります。入信したと云ふても眞に私の罪惡は解らなかつたのです。此の心があてにならぬ、宿業に觸れて惡事を爲さんとする事などは思はなかつたのです。然し此れでは親様が御承知なさひま

せぬ。遂に思ひも寄らぬ事を爲さんとした。普通の事にて思ひもつかぬ惡事を爲さんとした。此の頭が狂して居るのか此の神經が違つたのかと非常に煩悶し、入信後の事と云ひながら、此の如きを爲さんとは思はなかつた。やはり私は理想を求めて居ました。眞に煩惱の塊りと云ふ事は氣付きませんでした。何でも無い事なれど誤つたと思つた。自分で身を責めても最早取り返しがつきません。如何にしても地獄に落る身だ。此れが地獄に落ちんて誰が落ちるか泣きました。歎息を何度讀んでも有難くならなくなりました。佛の相續と心に念じても救ひの手は遠く去りた様な心地であります。自分ながら此の身が恐しい、此の身に飽きが來ると苦しんだ。私は廻心と云ふ事が聞きたい。念佛の行者自然に腹をも立て惡しきなる事をも犯しと云ふ第十六章を幾度もくり返しても悦ばれません。私は悦び心を頼みとして居ました。悦びが消ゆれば心配し、悪い心が起れば心配して居ました。人の信仰が目についたり私の心の悪いのが目について多忙であります。色々と心に計らひを致します。心は平穩ではありません。一時は以前に増して苦しみました。私は何處までも嬌慢の子であります。人が何と云ふても私は眞に惡人であり、眞に懺悔します。管瀨夫人の『悦びのあと』を兄と二人で讀まして頂きました。彼のやさしさ夫人の心でも尙惡人と仰せられます。其んなら私は何と云ひましよう。夫人は日々の行ひが淺ましいと深く懺悔されて有底に日誌に書いてあります。父親の心を思ふのが何よりも孝行である、廣大なる御恩であります。自分の淺ましいにつけも御親の御恩を思ふて泣きますと書い

ります。日記中至る所に感涙すると書いてあります。讀んで行くに従て私も泣きたくなります。懺悔に絶へぬと書いてあれば私も眞から懺悔に絶へぬのです。眞に南無阿彌陀佛と書いてあれば私も心の底から南無阿彌陀佛と稱へます。至る所に御稱名の書いてない所はありません。此れを見るにつけ心の底から御稱名を稱へざる事はありません。私は眞に此の時に懺悔しました。心から私の頼みにならぬ事を味いました。私は立ちて直ちに便所に入りて飽く程泣きました。私程の惡人はない、此の惡人を能くも見捨てなくて愛して下さる、地獄に落つる事は必定であります。其の罪を只今消して下さいました。私は長い間親様をあまり軽く見過ぎて居ました。又余り私自身を重く見過ぎて居ました。此の私は私しと名の付く程の氣のきいた人間ぢやありません。悦べるとか、又は感謝し得るものとか、其の様の感心した者ぢやありません。屋根の瓦とか、又道途の土石と變りのない無意識のものであります。今迄は慈悲と私と平均して居ました、私は無限に下に落ちました、慈悲は無限に高くなりました。落ちて苦しくはありません、落ちて嬉しうございます。何の理屈もありません、又感情も此の場合には有りません。私の苦しみは天秤の上に取り去られてしまいました。歡喜の涕より外にありません。懺悔の涙より外にありません。今迄泣いた事はありませんけれども此の時は泣きました。人の前に出られる様な私ではありませんけれど、又出て来ません。此の場合に何と云ふてよいか解りません、表す事が出来ません。目もあり、耳もあり、口もあり、手もあり、足もある人格的の慈悲

悲の塊り、智慧の塊りの如來様をはじめて拜む事が出来ました。往生したと云ひましようか、蘇生したと云ひましようか、心身脱落と云ふてようございますか。申し様はありません。唯南無阿彌陀佛ばかりであります。斯くまで貴き斯くまで廣大なる意味ある言葉の慈悲に對しますれば、何の私の此れ位の罪業深重も決して重いことではありません。いくら私が輕卒な嬌慢な名利の塊と云ひましても佛智は無邊でありますから、此様のものでも棄てられせん。お神棚の下で兄に唯此れだけ云ひました、女などだつたら、涕潸然と下りましよう、私は泣く事も出来ない、土地人形の如きものであります。私が此の口で一口云へば名利で云ひます、此の手で手紙を書けば名利で書きます、書く事さへも出来ず、云ふ事さへも出来ません、唯直接に親様に懺悔するばかりであります。私は一人て苦しんだ變りに一人て悦びます。實に以前と雲泥の差であります。私は近角先生に欺かれても、郷里の先生に欺かれても、兄にすかされても、少しも恨みとしません。後悔はしません。先生が九段で此の慈悲悲一つ頂きさへすれば、人が何と云ふても恐れるに足らん、唯々此れ一つで充分腹がふくれて満足してしまふと云はれました、其れが今であります。一ヶ月もたぬ内に私は近角先生と同じ人間に同じ凡夫にならして頂きました。近角先生の手からは距離はしません、假令死んでも先となり後となるばかりであります。一人して喜ばざ二人とおもへ、二人して喜ばざ三人と思へ、其の一人は御開山聖人であります。私は御開山聖人と一所に悦びます。御開山聖人の御悦びが、七百

年後の今日此の私に移りました。私の此の悦びは私の友人、又は知人又は兄弟親戚にきつと移ります。私は私の周囲の人に同情致します。私の周囲の人は却て可哀相に思はれます。いくら榮華をしても私より先に成功しても、電光石火の世の中ではありませんか。然も其のものは吾が物にして吾が物ぢやないぢやありませんか。假令ひ夫となり妻となりても其れは眞の吾が物ぢやないぢやありませんか。然し私は私の者として持つて居ります。先生方は眞の吾が者であります。私の兄は眞の兄であります。親子兄弟と云つても眞に此の誓ひなかつたならば、眞に親子でない、眞に兄弟ではないぢやありませんか。親にも知らしたい兄弟にも知らしたい。然し此れが人間の手で出来るものではありません、仕方がありません。難中の至難、此難に私が救はれたのは實に宿縁がよかつたのです。あゝ弘誓の強縁は多生にも遇ひ難しと云ふてあります。然しこれ迄に爲して下さいますには、余程く手が入りました。長い間御苦勞をお懸け申しました。此と云ふも皆様の御蔭であります。今迄憎いと思つた人も決して決して憎いとは思ひません。今迄経験のない同情が起ります。愛情が起ります。私は私の學校は大嫌いと思ひました、此の頃は此れよりよい學校は外にありません。規則は堅し家庭的ではあるし、教授連でも他學校と比べて學生の面倒を見て下さる情が厚い。早く學校に行きたいと思ひました。友人が悦びて呉れるでしょう。友人が色々忠告して呉れました友人の心情が今始めて能く了解できました。友人も澤山居る内て私程能き友、心の落ち付いた友を持つた者は恐くはあります。

い、皆勉強家眞面目な友人であります。然し信仰があつて呉れればよいがなと思ふ事が切であります。然し此れが人間の業では出来ませんものを。今まで友に對して距てたのは私が悪かつた懺悔致します。私は今迄は懺悔と云ふものは申譯の爲でありました、然し眞の懺悔と云ふものは慈悲に氣付かなければ出来るものではありません。私は苦しさで落ちつかなかつたが、此度は喜しさに落ちつきません、家に居る事が出来ません。直ちに親戚なる法光寺に行きました。先生から書いて頂きました「應身三十三、常觀其音聲、楊柳枝頭露、到處多月明」の扇を先生とも思ひ親とも思ひ、手から離さなかつたのです。何となれば此の詩には先生の御名前が人つて居りますものを。法光寺の叔父は昨年長夢將醒處慈光甚顯明と云ふ詩の絶筆を残して故人となられました。其の書眞と其の絶筆とは居間に掛けてあります。叔父には余程云はれました、何れ其内に頂きますと吞氣にして居ましたが、最早叔父の跡を逐ふて行く事が出来ます。跡に残された姉さんは私を非常に悦んで下さる。御信仰があるからと云ふてやんやと賞めて下さいます。姉さんは私の心の底を御存じないのも最もです、私は惡人ですよ、姉さんは私の行儀を御存じない、て、唯賞める事ばかりされます、其れはあまりひどいと御堂に行て一人で泣きました。姉さんはよく謂はれました、男子と違て女の心は浅ましいものです、惡人と云はうか何と云ふか、私は御堂を燒き、又大切な子供も無くし、其れでも此惡人と云ふ事を氣付きません、悦べるも感ずるもあつたものではあります。然し丈夫な丈夫な此の慈悲様がありますから、心が

きくなりて一寸も苦勞がありませんと云はれます。實に私に取りては目の前のお説教であります。亡き叔父の事を聞いては泣きます。叔父の居間に寝て叔父の居間てゐる眞の前で食事をします。食事が進みて困ります。四日して岩石山を越へて叔母の内の正福寺に行きました。山の峠で東を見西を見て又泣きます。下駄の尾が切れたと云ふては難有くて泣きます。清き水に顔を洗ひ足を洗ひ手を洗ひするにも念佛が出ます。岩石山は昨年と變りません、流れの谷水も昨年と變りません、然し山も山道も昔しに變りはないけれど、變りはたつたのは此の私の心であります。正福寺には何處の道を通つたか覺へません。山門を入つて行きますれば、最早兄が先きに來て居ます。私の夜があけたのを通知に來たのであります。正福寺の姉や叔母も悦んで下さいました。丁度此の時にお説教が始まつて居ます。加來様の下で聞いて居ます。高座上で從兄が金剛堅固の信心は佛の相續より起ると講義して居ります。そして連師時代に道徳と云ふ人が自分の惡しき事をしりて流涕懺悔したと云ふ例を取りました。私の事と少しも變りませぬ又泣きたくなります。不思議と云ふ程色々事が代る々々起りて來ます。此の時の心地は云ふ事は出来ません。悦びも冷へますけれども、心は平安であります。余り頭を壊した爲か正福寺で不眠症に陥り一週間位は一睡も致しません。けれども心は至て平安であります。病氣保養の爲學校は二週間ばかり缺席しました。クラスの友から又は縣人から同室の友から色々な心配して尋ねて呉れます。私は嬉しくて仕方はありません。早く學校に行つて友人を安心させたいと思ひまして歸心

失の如くであります。友人には大悟徹底したと通知しました。そして先生に別れを告げ、親兄弟に別を告げて再び東京に出立しました。別れに兄は自分等は毎日毎夜大悟して行く常大悟であると云ふて呉れました。先生は飯塚驛まで送つて頂きました。あゝ自ら反みて疼しからずんば千萬人と雖も吾れ往かんの勇氣があります。感情に昇せて悦ぶ事もあります。今迄の悦は頭の頂上のみの悦びでありました。此度の悦びは腹の下から全身湧き返りて悦びます。そして腰がしつかと落ち着きます。途中瀧車の都合で京都に下らねばならぬ様になつて居ります、仕方がないから下りて御本山に參りました。丁度御眞影様を拜む事が出来ました。多くの貴僧のお讀經の下にて多くの老人ばかりの中に紅一點此の二十才坊主が涕瀝然と下ります。申すも愚か云ふも言葉には盡くせません。一時間ばかりの中に六角堂、知恩院等を參詣して、彼の寂しき吉水の御房に參詣致しました。四面森にて聞かれたる昔ながらの古き御堂は唯一つに苦むして居ります。楓の葉は朝風に吹かれて石段に鳴く蟲を掩ひて、靜かなる事深山の如くてあります。しばし佇みて七百年の古へを思ひ、石地藏の肩に手を置いて兩聖賢の像を偲び、湧き來る涙の感想は留どもあへず出て來ます。あゝ唯一言仕合せなるかな仕合せなるかな。東京に來てからは皆なもののが私を可愛がつて呉れる様にか見へません。君か安心したから僕も安心したと云ふて呉れます。或る友人は是非とも佛敎を信ずると云ひ出します。或る友は家庭問題で苦しんで居ましたのが安心しました。私は今花の都に居ります。花の都に至るには御法一つを聞くの

花であります。私の爲の記念祭ではないけれど、創立四十年記念で皇太子殿下も本校に御臨場になりました。御聖旨に出てたる御勅諭も下りました。當日は先生もお出で下さいました。悦びにあまつて居ります。

私は『信仰の餘瀝』と清澤先生の『精神講話』とが一番好きであります。あまり長くなりませんでした。苦悶を長くかきましたから、從て悦びも長くなりました。然し悦びは充分に書く事が出来ません。直接にお話しする方がよろしいと思ひます。お察しを願ひます。南無阿彌陀佛。

舍監室の隣りにて十一月十七日午前八時より

全 十八日午後九時に終る



講話

如來の加威力

(求道學會日曜講話)

近角常觀

只今丁度お尋ねがありて、お話しした事が、今日話さんとする題目に恰もよく當る故、之れに引き次いで話さうと思ひます。今日の題は「如來の加威力」といふ、如來の威力を加へらるゝといふ事である。之は今夏求道會の講本に讀みました『教行信證』信卷の初めにある御言葉で、今の話によく當るのである。其處の御文と拜讀すると、

然るに常没の凡愚流轉の群生、無上妙果の成じ難きにはあらず、眞實の信樂實に獲ること難し。何を以ての故に、乃至如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣惠の力に由るが故なり。遇淨信を獲ば、是の心顛倒せず是の心虛偽ならず、是を以て極惡深重の衆生、大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲るなり。

斯く『信卷』の切めに、信を告示し下さる處に、此の「如來の加威力」なる御言葉があるのである。之は源を言ひますと、恐らくば天親菩薩が

世尊我一心に盡十方無碍光如來に歸命して、安樂國に生れ

んと願ず

と仰せられた。此の御言葉を曇鸞大師が『註論』に解釋して夫れ菩薩の佛に歸する、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動靜已に非らず、出沒必ず由あるが如し。恩を知り德を報ず、理宜しく先づ啓すべし……

之は『淨土論』の頁を開くなり、天親菩薩は「世尊」と呼びかけて、「我一心に盡十方無碍光如來に歸命し、安樂國に生れんと願す」と先づ自己の信念を告白し、啓白して居られる。夫れは恰も孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して、動くにも止まるにも更に自己を離えず、出沒必ず君父の命によるが如く、天親菩薩も『論』を述ぶるに當りて釋尊に自己の中心の信念を告白し、自誓を表白せられたのであると告示なされたのである。次ぎに直ぐ續いて

……又所願輕からず、若し如來威神を加へずば、將何を以てか達せん。神力を乞加す。このゆへに仰いて告げたまへり。我一心とは天親菩薩自誓の詞なり云々。

とある。「又所願輕からず」此事は容易な事でない、大事業である。若し如來威神を加へ給ふにあらずは將何を以てか出来やうや、神力を乞加す、このゆへに仰いて告げたまへり」之は一寸聞くと此方より威神力を請ひ求むるやうにあるが、要するに「我一心とは天親菩薩自誓の詞なり」て、天親菩薩があなたの御自誓を御述べなされたのである。唯此方より願ひなされたのでは無くて、佛此の威神力を加へ給ふにあらずば、何うして我々安樂國に生るゝ大願を達せんやと、此の意味であなたの喜びを披露なされたのであると、此の告示

しが『論註』の初めにあるのである。之が加威力の言葉のものであらうと私は思ふのであります。

之は言葉の上の筋道を申したのでありますが、其の意味を親鸞聖人は『信卷』の初めに持つて來て「然るに常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成じ難きにはあらず、眞實の信樂實に獲ること難し」——實に難有き御言葉である。我々常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果は必ず成じ得るのであるが、其のもとなる眞實の信樂を獲る事が實に難いのである。我々此の眞實の信心さへ得れば、誰しも無上妙果を成じて佛になる事は出来る。我々佛に成る成れぬの境目は、實に此の眞實の信心の獲る獲られぬの一つ、其の信心を獲る事が實に六つかしいのである。何故六つかしきかと言ふに、即ち「如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣惠の力に由るが故に」て、此の信心は我々の方より得ようと思ひ、修行し工夫し感じ喜びて得るのでは無い、如來の加威力に由るのである。我々此の罪惡深重の仕て見ようなき者を哀れみ給ふ、其の佛の御心、及び此の者を助け救ひ給ふ佛の自在神力とによるが故である。

之は聖人が願と力とを分けて告示なされてある。佛我々を助けてやり度いと思召すあなたの遣る瀬無き心が願、願のみでは仕様が無い故、其の願より修行し成就して佛の自在神力の力が顯はれて來るのである。言ひ換へると、佛が我々を助けてやり度いの願心がもとになつて夫れより遂に長々御苦勞の結果自在神力の佛の姿が現はれ下されたのである。佛の本願には十方衆生悉く助けずば、正覺は取らぬ、佛とは成らぬとお誓ひ下されてある。其の助ける事出来ずば佛とは成ら

ぬとは、即ち我佛と現はれた上は、其の如き到底助からぬ罪深き者に、此の大悲を届けて必ず救はにや措かぬぞ、夫れが出来ぬは、言ひ換へれば我に其力具はる迄は、佛とはならぬぞ。即ち我佛となる上は、如何なる者でも其の者を助けぬば措かぬとある願なのである。而して其願成就したのが今日慈悲の塊りの阿彌陀佛の御姿である。て佛の本願力となる、此願と力との伴つた力である。『註論』の中には又、不慮作住持とは、もと法藏菩薩の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力とによる。願もて力を成じ、力もて願につく。願徒然ならず、力虚設ならず、力願あひかなうて畢竟して差はず、此の故に成就と言ふ。

設へて言へば、貪乏な者を助けてやり度いとの大御心より起つた願である。併しながら願のみあつても、之を助ける資が無くては何にもならぬ。然しながら世間に資丈け持つて居る人は幾らもあるも、其の資が此の願より來たる資でなくては何かならぬ。て今阿彌陀如來の御資は、此の貧しき仕様の無い者を救ふとの、造る瀬無き願より現はれた自在神力の資である。其の造る瀬無き願心より起りて、今日自在神力の資が積み重ねられてあり、此の力と願とが相かなうて、我々を待ち受けて居て下さるといふのである。

て先きの話に續けて人生方面より申すならば、我々人間の力は畢竟するに駄目である。病氣をすると厭でも死んで行かねばならぬ。自分の行ひに一つとして立派な事が出来るか、出来ぬ。抑佛の願のもととは之れである。我々の茲が目當てて深重の本願を起し下されたのである。我々今迄之は何病の

ぬ。一煩惱と雖も取り去れず、一善と雖も出来得ぬ我々は漸次に干ていく水中の魚の如く、我々の運命は見え透いて居る。佛今力を加へ給ふは實に茲である。其の仕て見やう無き者に廣大の慈悲、大慈を加へ、其の仕様無き者を哀れみ見捨て給はず、必ず佛の廣大な浄土へ往生せしめんとの大願より、此の煩惱の止まぬ仕て見やう無き者に、此の佛の慈悲を知らず爲めに、南無阿彌陀佛を御廻向下さるのである。て此の南無阿彌陀佛は、此の仕て見やう無き私を、親が可哀相ぢやと見捨て給はず、即ち大悲の親が先づありて我々があるのでは無く、我々が此の仕様の無き有様を先づ御覽下されて、其者の燈となり、其者を救はんが爲めに、其の者の爲めに永々御苦勞下されて、佛とは現はれ下されたのである。して我々の借金も病氣も何もかも初めより皆な承知して、其の者を見捨てぬと呼んで下さる、此の見捨てぬが一通りの見捨てぬではなく、飽迄そういふ者に向つて其の惡しさを斥けず、其の者を助け遂ぐるぞ、其の爲めに佛茲に居るのであるぞ、と呼んで下さるのである。

全体我々、自分の罪惡は自分で呆れる位、寧ろ此罪惡には呆れて捨て、仕舞はれるが普通である。夫を惡しければ惡しき程夫れが可哀相ぢや、其罪を知らぬて居るのが哀れぢやと、言つて下さるは特別である。我々人生で今現に水火の難に陥入つて苦しんで居る、もう何とも仕て見やうが無い。其者が可哀相である、其者を何うかして救つてやり度い、飽迄其者と苦を共に仕度い、といふが佛の本願である。一寸考へると何でも無きやうに思ふが、なか／＼一通りの事では無い。角だつた話

藥と言つて居ても、實際自分が病氣になる迄は人事になつて居るけれども、實際自分が病氣に罹つて見ると、病人全体の爲めの藥では無い、今現に病氣に苦しめる自分の爲めの藥であり、自分の爲めの福音である。此仕様の無き自分に飲まする爲めに下されし一服の藥となるのである。今如來の加威力は、人生一つとして當てにならぬ仕様の無き我々病人、——若し痛切に感ぜぬと言ふならば、痛切に感ぜぬ程夫れ程に淺間しき我々、痛切に感ぜぬからとて、無常の人生が常住になる譯でも無く、痛切に感ぜぬからとて、罪惡は何處迄も罪惡である。此無常罪惡の仕て見やうなき人生にありて、切り詰めて痛切に思ひつめた處で、夫は行き詰つた丈けの事であり、又人生、田あり宅あり財ありと喜び、其人煩悶無しと喜んで處で、夫れて人生が當てになるのでも無い。又之に執着し煩悶し苦しんだ處で、夫れが眞に人生の無常罪惡を感じたとも言へず、矢張り一日でもいゝから、立派に過し度いといふ豫想の下にも、かいて居るのである。て要するに苦しむも惱むも、人生は矢張り人生、我々の力には何とも仕て見やうが無い。抑々之が佛の願の來て下された大もとなのである。『和讃』には、

如來の作願をたづねれば、
苦惱の有情をすてずして、
廻向を首としたまひて、
大悲心をば成就せり。

如來は我々の其の苦惱を能く知り給ひて、此の苦惱の衆生が、「煩惱無邊誓願斷」と、其の煩惱を斷ち其の無常をさる事が出来る位ならば、念佛は入らぬ、如來は入らぬ。直接に人生に光を認めたり、罪惡をとりさる事出来る位ならば、佛は要ら

なれど、つまり通佛教にいふ因果以上の話、普通ならば因果の理法に従ひて善因善果、惡因惡果、惡しき者は到底助かる筈の無いのが本當である。其上より現はる、諸佛の法と雖、此原則を離れぬ。座禪して佛の境に行き、六度の行を修して佛になる、寧ろ之が當り前である。因果の道理、三世諸佛の教法、皆之である。が如何せん、其道では我々は行けぬ、助からぬ。助からぬから其惡の止まぬ善の出來ぬ其者を助け度いとあるのが、佛の御心なのである。衆惡莫作衆善奉行、我々は作す可らざる惡をなし、爲さざる可らざる善が行へぬ。して見れば我々は其の道では到底救はれぬから、其者が實に可哀相である、——併しながら唯可哀相丈けでは、佛教の原則として因果を離れぬから助けられぬ。すれば何うするか。其の仕様の無い者を、自分のまことを差向けて飽迄善くする、向けて——其者が氣付く迄飽迄善くして助けるとあるが佛の御心である。而して此のまことの衆生に届く迄は佛とはならぬ、疑ふ者には其の疑の晴れる迄飽迄此のまことを届けて吾が心を通さずには措かぬ、とあるが是れ佛の本願である。而して此の願遂に届きて成佛し下されたが即ち今阿彌陀佛の御姿であります。常に申す法然聖人が親鸞聖人に御付屬の善導大師の言葉にも、若し我成佛せんに、十方の衆生我が名號を稱して、下十聲に至らん。若し生れずば正覺を取らず。彼の佛今現在に成佛したまへり。當に知るべし本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得。

夫れ故今現に佛は、其の願満足して正覺成就の阿彌陀佛として、我等が上に其の造る瀬無き心を傾けて居て下さるのであ

る。故に佛が佛と云なり下されたが、我々の往生に疑ひの無い何よりの證據。五劫の思惟永劫の御苦勞といふも、此の私が惡止まず、善出來ぬ其處を御見抜き下されて、其者を助け度いばかりの御苦勞に外ならぬ。

『和讃』には又、

至心信樂欲生と、

不思議の誓願あらはして、

十方諸有をすゝめてぞ、
眞實報土の因とする。

我々如何なる者でも、此の罪惡の身として自分に因作りて善くなる事出來ぬ故、其の爲めに佛が因を積み重ねて、至心信樂欲生の御まことを以て私の胸に之を届けて下さる。此の遺る瀬無き御まこと心の届いて下さるが、即ち佛の加威力であります。

二

其處で我々如き惡しき者が、何うしたならば安心する事が出來るかといふに、人が惡くてもよいと言つても安心する事は出來ぬ。私が苦しんだ時、友人は皆な、君は自分で惡いといふけれども、惡い事は少しも無いと言つて呉れたけれども、更に安心は出來なかつたのである。進んで惡くても構はぬと言つて呉れても、人は構はぬか知れぬも、自分の方で構ふ。夫れならば善くしたらいいと無いかと言はれても、夫れが善くする事出來ぬから、自分は苦しんで居るのである。もう斯うなると、善くも惡しくも出來ず、何とも仕て見やうが無い。茲に於てか佛の仰せが現はれて下さるのである。如何なる仰せかといふに、汝等善く仕やうと思つても、夫れは出

來得無い、『信卷』の中には。

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至る迄、穢惡汚染にして清淨の心なく、虛假誑僞にして眞實の心無し。

とあつて、人間は如何程力みても、清淨眞實の心が起るものでなく、眞地目に成り得るもので無い。信する心も喜ぶ心も、淨土に参り度いといふ心も何うしても起らぬ。其の汝を見て、其者が見捨てられぬが、佛のまことであるぞと呼びかけて下さるのである。まことといふは清らかな玉のやな物では無い。まことはまことならざる者を飽迄見捨てぬから、まことなるのである。まことならざる者をまことを以て哀れみ、まことならざる者の心にまこと心を届け、斯く迄此方はまことを以て見て居るのであるがと、遂に向ふ様のまこと心が私のまこと心の心に貫徹して下さる。其處迄續くがまことなのである。今至心信樂欲生の三信と言ふは、此方からまことにしたり、此方から喜んだり、此方から極樂に参り度いと思ふて無く、我々此方にはそんなものは無いのが、其の無い私を御覽下され佛が本願をお建て下さる時、其のまこと無き者を我がまことを以て助けるとお誓ひ下されたが至心であり、其遺る瀬無きあなたの慈悲が、即ち信樂であり、其者に佛の國に生れんとする者と思へと呼びかけて下された御呼聲が欲生なのである。要するに我々斯る不まことの者に、此者を哀みれて佛の方よりあなたの御まこと、廣大の威神力を加へて下さる、此の外に無いのであります。

其處で如來のお心とは、常に申す如く、地震の時に民百姓

の苦しむを哀れと思召し、陛下よりの御使ひが民百姓の破屋へ草鞋掛けにて御出下さると同様に、罪惡深重の此身なればこそ、如來の御まことは其者目がけて現はれて下されたのである。『歎異鈔』に

彌陀の五劫思惟の願を案ずるに、ひとへに親戀一人がためなりけり云々。

して見れば實に人事では無い、此の仕様なき私一人の爲めに現はれ下された如來の御まこと、我々は此の廣大の佛のお心ましまさずば、一日も片時も安んじては居られぬ。此の遺る瀬無き不思議の御哀みてあればこそ、遂に如來のお心が我々の心に貫徹して下さるのである。又『和讃』には、

無明長夜の燈炬なり、
智眼くらしとかなしむな、
生死大海の船筏なり、
罪障重しとなげかれ。

斯く如來のお慈悲は、此方より求め考へて來るにあらず、如來の方より廣大のお力にて、威神力を此方に加へて下さるが佛の本願、佛の親心であります。

其處で『信卷』初めのお示しに戻りて「乃まじ如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に由るが故に」——大悲廣慧の力といふは、佛の廣大な大悲、廣大な智慧である。今朝も『和讃』を拜讀すると、

彌陀智願の廣海に、
凡夫善惡の心水も、
歸入しぬればすなはちに、
大悲心とぞ轉ずなる。

彌陀の智慧の廣大な海に、凡夫善惡の心水も——即ち凡夫善惡の心の事である、——歸入しぬれば即刻に、如來の廣大な大悲の心と轉じ變はるとの御和讃である。我々今迄は、あれが善

いとか之れが惡いとか、何のかのと百人百色様々の心を持つて居るのであるが、如來の廣大智慧海に入らして貰ふと、一邊に皆な變つて仕舞ふ。『大經』の中には又宣はく、

如來の智慧海は、深廣にして涯底無し、二乗の測る所に非ず、唯佛のみ獨り明に了したまへり。

我々は明け暮れ善い惡いと言つて居るのであるけれども要するに我々は罪の深い者、我々の言ふ善惡は、絶對の善惡では無い。我々が自分で善い事出來るなど、思つて居る間は、まだ佛のお心が分つて居無いのである。何ぞ知らん其者を眺めて居て下さる佛のお心を頂いて見ると、自分に善い事が出來ると思つたり、人の善し惡しを彼是れ氣にかけて見たり、實に厚かましきの限りである。又我々が心に惡いといふのも廣大な慈悲の前には、實に旭日の前の氷同然、寧ろ眞に惡いと言ふのは、何が惡いかと言へば、我々が腹立てる心の惡よりも、其者を見捨てぬと向つて下さる佛のお慈悲を頂かぬ惡が眞の惡である。若し之を惡と言ひ得べくば、此遺る瀬無き御慈悲を聞きながら、自分は惡くして因るなど、言つて居るのは眞に申譯が無い。夫れが今遺る瀬無き佛のお心に歸入しぬれば、皆な一度に如來の廣大な大悲心と轉じ變つて仕舞ふのである。今迄善し惡しと言つて居た者も、此の廣大な大悲を頂きて眞に難有いと感泣すれば、今迄の善し惡しは皆な無くなり唯有難いばかりとなつて仕舞ふのである。而して其の心を以て自分の周圍に對するに、人の善いが善いて無く、惡いが必しも惡いて無い。そんな善し惡しを離れて、誰しも何うか此のお慈悲を頂き呉れよといふ心ばかりになる。此れが即

ち常行大悲の益と言ふのであります。

偕て斯くの如く如來が廣大な力を以て、我が南無阿彌陀佛と名乗りを揚げ、阿彌陀佛と姿を顯はし此の世に顯はれたは、汝の如き罪深き者を救ひ、淨土往生させるばかりに來たのであるぞと、廣大な本願の御力を以て私の上に向つて、下さる。信仰を得ると言ふも、外では無い。此の遣る瀬無き願力を頂く一つなのである。此の仰せを聞くなり、あゝ今迄斯くの如き廣大の佛は、お慈悲をしますとは知らずに居りました、今迄佛は疑はぬ、宗教は疑はぬけれども、今一步一心になれぬから頂かれぬ、など言ひて居りましたは實に申譯が無いと、頭が下つた時が、即ち次の「遇淨信を得ば是心顛倒せず、是の心虚偽ならず」である。凡そ世の中に何が堅いと言つても、此のお慈悲頂いた程なしかな事は無い。實に智慧明達功德殊勝とは此の味ひである。自分の心に、此の者を見捨て給はぬ御慈悲心と徹到し、眞に自分の淺聞しさが知れて見れば、あゝ實に此の者を哀れみ給ふお慈悲であるか、設ひ今生命畢らうとも、此のお慈悲ばかりは難有いとなる故、折れやうたつて折れやうがない。是を以て極惡深重の衆生大慶喜心得、諸の聖尊の重愛を獲るなりとあります。『選擇集』の中にも、極惡最下の衆生の爲めに、極善最上の法を説く云々と申されてあります。

猶ほ之に就き、此の間九州に行き福岡縣の上野で話しました。其時に茲にお出になる或る若い御婦人の方の姉様になる方が御出になりました、初めてお目にかゝつた方であるが、實に能く喜ぶ方である。私は不思議に感じまして、何うして

そんなに喜びになつたかとお尋ねした。其時御一言なるも其お答へが實に難有い。申さるゝには御存知の通り私の家は基督教である。處が方づきて來た今の家が眞宗であるもの故、しきりに眞宗の御説教を聴聞したが、中々分らぬ。其中熊本て大友なる方の御説教を聴聞すると、其中に斯ういふお話があった。其お話が通俗なるも實に有難いのである。――昔別當が或殿様の馬の伴をして行つて、道々頻りに南無阿彌陀佛々々々と念佛を稱へる。すると馬上の殿が聞き咎めて、「汝そんな念佛など止めよ」と叱つた。すると其別當が「恐れ入りました」と謝り果てつゝ、又いつの間にか忘れて念佛して居る。此度は殿機嫌を損じて、「止めよ」といふに何故止めぬ」と一喝した。別當は「申譯がムいませぬ」と深く恐れ入りつゝ、又暫くするといつの間にか南無阿彌陀佛とひとりで喜んで居る。最後に殿様は非常に立腹して「貴様之程言ふに、手打にするぞ」と、其一言に別當ハット言葉がつまつて仕様がなくなり、暫くありて「設ひ手打になりても此の念佛ばかりは止められませぬ」と。殿も其の一言に、殺されても止められぬ念佛かと驚いて馬より下り、別當に法を聞いたといふ。此の話を聞いてあゝ殺されても死ぬても止められぬ念佛であつたかとふつと氣が付き、夫れから喜ばせて貰ふやうになつたとの御話である。私も之を承はりて非常に難有く、あゝ實に殺されても死ぬても止められぬ念佛である、と一入深く喜ばせて貰うた事である。之をお土産話として、此の講を終ります。南無阿彌陀佛。

雜報

則我善親友

近角常觀

他力の信心うるひとを うやまひおほきによりこべば
すなはちわが親友ぞと 教主世尊はほめたまふ

祖師聖人六百五十年御正忌報恩講の時節に相成つた、實に一生の間再び遇ひ奉ることの出來ぬ、あらたかなる影向の梵筵が開かるゝ次第である、此の時に於て、而も報恩講結願に常に諷誦し奉る此和讃を以て讃嘆して頂くことは實に尊き勝縁であると感謝いたします、この和讃は大經東方偈に開法能不忘、見敬得大慶、則我善親友の意味を以て御製作なされたのである、申すまでもなく、此第一句より第三四句へ直に續く語氣である、そして第二句は一寸註を入れた様な口調になつてある、他力の信心うるひとを、すなはちわが親友ぞと、教主世尊はほめたまふ、敬ひ大に慶べば、との意味である、勿論經文順序の儘を和譯なされたもので、他力の信心を得て、敬ひ大に慶べばといふことなれど、他力の信心うるひとをと特に呼び上げられたので、言語が著しく強くいいたゞける、從て語が屈折して敬ひ大に慶べはの句が如何にも亦著しく急所を押へた御言である、開法能不忘といふは、開其名號と同様であります、してみればうやまひおほきによりこべは信心歡

喜であります、開法能不忘、開といふは信の卷の御釋の如く、「聞くといふは衆生佛願の生起本末を開きて、疑心あることなき之を開といふ」耳にきくことではなく、心に聞くのであります、やる瀬なき大悲の親心が聞こえたのである、親様の呼聲が私共子供の心に聞えたのである、親の親切が胸に届いたのである。

前週或朝數人の求道者に御話をして居る處へ、或方が其兄なる方よりの事附物を持參して下されて、其話を傍聴して思の儘を飾氣なく申さるるには、私は人が何んでも都合よき時は御慈悲じやと喜び、悪い事をした時には、悪くても御助けじやといふて横着して居らるゝ様に見えて仕方がないと申された、そこで私が直に申しまするには、それはあなたが佛様の御思召を惡くとも可いといふと誤解して居らるゝからである、親は子供が不具でもよいといふものはあるまい、其如く佛は我等が悪くてもよいとは思召さぬ、されど不具に生れて來れば親は一層哀れ可愛想に思ふて涙をしぼる、其如く不具なる我等罪惡の子供の爲に遣る瀬なき大悲の胸をいためさせらるゝのが本願じやと申したれば、忽ちに其人は涙をはら／＼と落して申さるゝには、ア、私は大に間違つて居りました、たとへば片手なき子を親が可哀がりたれば他の片手をも断ちて一層親に可愛がられようとはすまいかと申した様なものであります、勿体ないことを申しました、初めて親様の遣る瀬なき御心を難有頂かして貰ひましたと即座に喜ばれた、又四五日経つた後に或婦人の方が家内のもものと共に御法の話をして居ります時に、家内のもものが此比喻を繰返へし申し

ましたれば、其人が俄にサト顔色を變へ、偕はとばかり驚きの様子でありました、猶私が御話申さんとして請し入れた其時は落涙千行で、さて申さるゝに、私に一寸耳の悪い子がありません、其の子の事を不憫と思ふて居ります、今同様に佛様が私を憫んで下さるかと思へば御勿体ないことであります、ア、今迄是程うことがなせ頂けなんだであらうと申された、これが即ち心に親心が開こえたのであります。

能不忘といふは能は愚劣鈔に不滅に對する也、疑心の人とあります、他人ならば不具なれば嫌ひ避けるのである、愛し能はぬ、慈しみ能はぬ、しかるに大悲の親心ばかり我能く汝を護らんと仰せらるゝ、しかるに此の親心を頂かずして我の様な不具はたとひ親でも嫌ふであらふと思ふは疑心の人である、しかるに親は其の不具が一層不憫と思ふぞよとの親心をきくなり、コレハシタリと今迄は疑心、隔意、邪推、孤獨、無明の胸の中に、嗚呼此の親様だにましまさばと忽ち歡喜の心が起るのである、こゝを淨土論には能令速滿足功德大寶海とも善導大師は衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心とも申された、一たびかくいたゞいた己上は金剛堅固で、憶念相續するゆへに能不忘と申された、見敬得大慶、聞きたといふも、見たといふも、つまり此親様に遇ひたてまつりた心持じや、特に敬の字は難有い、見神の寶驗を言はれた綱島梁川といふ人は正信偈を讀みて獲信見敬大慶喜とある見敬の字を見て大に渴仰いたされた、龍樹菩薩の和讃に、恭敬の心に執持して彌陀の名號稱すべしと、同じく親心をいたゞくなり、何んとも言へぬ恭しく虔敬の心が起りて往生一定とかねてさきに慶ぶ

のを、うやまひおほきによるこべたと仰せられた。かく親心をいたゞきて見れば、我等は罪業深重の不具者なれど、特に親様の寵愛を受くる子にして下さる、さればこそ善導大師は眞の佛弟子と仰せられ、又妙好人とも仰せられた、夫故釋尊も善親友じやと讃めて下さるのである、『信卷』に極惡深重の衆生大慶喜心得て諸の聖尊の重愛を獲る也と仰せられたも是である、かくて佛の子である、弟子である、友達である、してみれば聖人も親鸞の弟子ではない、御同朋じや御同行じやとかしづきて仰せ下さるのである。

こゝに一つ注意すべきは動もすれば同朋といふことを十方衆生は如來の光明の中に棲むゆへ皆同朋じやといふ様に言ふものがある、なるほど佛は十方衆生皆たすけんと呼びかけたまへど、いよゝゝ其親心のきこえぬ間は佛弟子といふことは出来ぬ、親心をいたゞかぬものは同朋とは言はれぬ、御一代記開記にも、信心の上は四海の人皆兄弟なりとも仰せられてある、夫故唯今も他方の信心得るひとと仰せられたのである、其遣る瀬なき親心をいたゞかぬ己上は同朋とは云はれぬ、兄弟とは言はれぬ、同一念佛の御慈悲をいたゞきたるものゆへ、教主世尊は親友と仰せられ、觀音勢至も勝友となりたまひ、彌勒に同じとも聖人は御同朋此同行とも仰せらるる、若し此親心一つをいたゞかなんだらば逆如上人の仰せの如く永き世、開山聖人の御門徒たるべからずである、實に尊き御遠忌年の御正忌に遇ひながら此親心一ついたゞかなんだらば、何の爲にもならぬ遺憾千萬である、故に御同様に此遺瀬なき親心をいたゞき檀林寶座より影向ましゝて我等一人ゝを待ちかねたまふ聖人の思召を深く頂かねばならぬ。

時勢の要求する所、曩日求道會館設立趣意書の發表となりしが、爾來數年を経て未だ會館設立の運びに至らず、これ畢竟近角師が専心一意布教傳道に急にして、實際經營の餘暇を有せられざるが爲なり。然るに明年は學舎創設已後滿十年たらんとし、信仰の氣運正に純熟して、求道者益々多きを加へ、從來の設備を以ては此の要求を満足せしむるあたはず、且つ現在の家屋漸次朽敗して會館建築の必要は更に焦眉の急を告ぐるに至れり。

明治四十四年七月

世話人 (イロハ順)

西澤善七
小河滋次郎
大草慧實

瓦葺煉瓦造坪數八十八坪

御注意

求道會館設計概要

一金參萬五千圓

會館建築費備付品費
並ニ之ニ關スル諸雜費

求道會館設計豫算概要

荻野仲三郎
柏原文太郎
長尾收一
有田廣
澤柳政太郎

一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候
二、寄附金領收の節は近角常觀師より感謝狀を差出し、且つ求道誌上に報告仕可候
三、寄附金は御都合に従ひ分納月賦數回寄附等何れにても宜敷候

求道會館設立喜捨金

受領報告

(第四十七回)

金五拾圓也	名古屋	箕浦御母堂殿
金貳圓也	吳	由村繁之進殿
金壹圓也	越後	羽賀祐令殿
金壹圓也	府下	松崎壽三殿
金壹圓也	越中	荒井長藏殿
金壹圓也	十勝	青木久右門殿
金貳圓也	前橋	河野要治殿
金五圓也	東京	岩井三子殿
金五圓也	石見	財井隆觀殿
金四圓也	釜山	石井久三殿
金壹圓也	東京	原卓一殿
金壹圓也	長崎	正木新殿
金貳圓也	石見	鹿森作太郎殿
金壹圓也	越中	飛鳥寬徹殿
金壹圓也	高岡	吉田哲雄殿
金壹圓也	富山	桂香巖殿

小計七拾九圓也

通計參千五百八拾五圓八拾四錢也

內三十六年中申込未納分參百〇七圓七十五錢也

差引受領總額金參千貳百七十八圓九錢也

(自上年七月發賣日而之也)

求道會館建築寄

附金第壹回報告

(九月趣意書頒布より十月末日まで)

金四百圓也	福岡	有田廣殿
金壹百圓也	同	同御家族御一同殿
金貳百圓也	無名	氏殿
金壹百圓也	無名	氏殿
金壹百圓也	目白	長尾收一殿
金壹百圓也	目白	柏原文太郎殿
金壹百圓也	牛込	小河滋次郎殿
金壹百圓也	若松	和泉鐵次郎殿
金壹百圓也	久留米	高崎新三郎殿
金壹百圓也	本郷	荻野仲三郎殿
金壹百圓也	本郷	丸茂むね子殿
金壹百圓也	山形	福近藤清作殿
金壹百圓也	山形	福島治助殿

金五拾圓也	大森	戸田恒太郎殿
金五拾圓也	牛込	瀧澤三郎殿
金五拾圓也	加賀	米谷半平殿
金五拾圓也	麴町	小澤一殿
金參拾圓也	原宿	無名氏殿
金貳拾五圓也	小石川	志賀虎一郎殿
金貳拾圓也	若松	林龍三郎殿
金貳拾圓也	本郷	無名氏殿
金貳拾圓也	麴町	泉道雄殿
金貳拾圓也	本郷	生沼きく子殿
金拾五圓也	長野	齊藤きい子殿
金拾五圓也	福岡	木屋村求道會殿
金拾五圓也	若松	金成辨吉殿
金拾五圓也	朝鮮	光井香殿
金拾五圓也	日本橋	岡田政由殿
金拾圓也	東京	上川井みね子殿
金拾圓也	河内	杉崎大愚殿
金拾圓也	福島	渡邊安治殿
金拾圓也	近江	牧田孫右工門殿
金拾圓也	名古屋	松波寅吉殿
金拾圓也	芝	御木本幸吉殿

金拾圓也	仙臺	猪股昌輔殿
金拾圓也	山形	三井定殿
金拾圓也	同	岡田彌作殿
金拾圓也	若松	林直八殿
金拾圓也	同	佐治由吉殿
金拾圓也	同	原山金四郎殿
金拾圓也	同	鈴木久作殿
金拾圓也	同	林平藏殿
金拾圓也	福岡	七島源兵衛殿
金拾圓也	福岡	岡田千太郎殿
金拾圓也	麴町	田中敬信殿
金拾圓四錢也	横濱	堀やを子殿
金拾圓也	長野	上野啓造殿
金拾圓也	横濱	無名氏殿
金拾圓也	新潟	田中みよ子殿
金拾圓也	長野	伊藤傳兵衛殿
金拾圓也	同	同松壽殿
金拾圓也	新潟	増村度次殿
金拾圓也	群馬	草津町佛教會殿

内譯

一金五圓八錢也

一金五圓也

兒玉信義殿
日比野治三郎殿

一金拾圓也
一金拾圓也
一金拾圓也
一金拾圓也
一金拾圓也
一金拾圓也
一金拾圓也

[illegible][illegible]

石狩	鹿兒島	前橋	三重	本郷	近江	岐阜	本郷	新潟	山口	長野	岐阜	福井	香川	滋賀	同	大森	香川	新潟	鹿兒島
廣岡	林	河野	永持	前田	鈴木	松見	岩井	羽賀	東津	清水	能戸	山田	成瀬	磯部	同	今田	德田	篠原	藤
たつ子殿	平兵衛殿	要治殿	石之助殿	慧雲殿	忠右工門殿	心華殿	三子殿	祐令殿	佛教講習會殿	新藏殿	得一殿	平右工門殿	あさ子殿	駒吉殿	與之吉殿	高橋四郎右工門殿	宗藏殿	兼司殿	等影殿

一金五圓也	滋賀	西島重造殿	一金參圓貳錢也	鹿兒島	山口廣子殿
一金五圓也	兩國	加藤竹三郎殿	一金參圓也	佐倉	無名氏殿
一金五圓也	麻布	瀧川浩殿	一金參圓也	長崎	無名氏殿
一金五圓也	福岡	九州醫科大學佛教青年會	一金參圓也	富山	瀧本助浩殿
一金五圓也	三重	西川新十郎殿	一金參圓也	大崎	鈴木木梯殿
一金五圓也	山口	波多野靜子殿	一金參圓也	石川	佐々木了應殿
一金五圓也	大阪	勝野齊整殿	一金參圓也	山形	寺本了天殿
一金五圓也	芝	今井國太郎殿	一金參圓也	牛込	本多清安殿
一金四圓也	前橋	岩井せき子殿	一金參圓也	金澤	河崎じゅん子殿
一金參圓也	高田	太田秀穂殿	一金參圓也	横須賀	福住春次殿
一金參圓也	長岡	渡邊萬吉殿	一金參圓也	大森	田中一雄殿
一金參圓也	栃木	大澤善太郎殿	一金參圓也	同	加納鑑子殿
一金參圓也	能登	木越祐曜殿	一金參圓也	播磨	法受寺殿
一金參圓也	愛媛	佐々木善親殿	一金參圓一錢也	禮岡	野上鼎殿
一金參圓也	大分	和才誠司殿	一金參圓二錢也	新潟	大倉由松殿
一金參圓也	廣島	高橋四郎右工門殿	一金參圓也	鹿兒島	守蟠龍殿
一金參圓也	若松	大島德三郎殿	一金參圓也	山口	伊藤伊右工門殿
一金參圓也	福岡	峠しのぶ子殿	一金參圓也	本郷	佐藤兵太郎殿
一金參圓也	京都	高階哲三殿	一金貳圓十錢也	越中	清水巧證殿
一金參圓也	志摩	西川眞吉殿	一金貳圓也	前橋	佐長法薰殿
				豐橋	永井光子殿

一金貳圓也	小倉	神崎長次郎殿	一金貳圓也	京都	武井悌四郎殿
一金五十錢也	同	同よし子殿	一金貳圓也	石川	丸瀬清五郎殿
一金貳圓也	廣島	神谷伊津造殿	一金貳圓也	久留米	早崎靜順殿
一金貳圓也	福井	松田俊夫殿	一金貳圓也	廣島	桎尾治殿
一金貳圓也	小倉	齊藤信親殿	一金貳圓也	下谷	爪生榮技子殿
一金貳圓也	福岡	有田政次郎殿	一金貳圓也	大森	小林のぶ子殿
一金貳圓也	小石川	本田惠孝殿	一金貳圓也	福岡	一ノ瀬重幸殿
一金貳圓也	石見	古田清治殿	一金貳圓也	滋賀	川那邊圓照殿
一金貳圓也	名古屋	長谷部愛治殿	一金貳圓也	三重	柳川こす子殿
一金貳圓也	大分	同とみ子殿	一金貳圓也	石見	菅三秀殿
一金貳圓也	廣島	是利小隙殿	一金貳圓也	香川	植田ゆき子殿
一金貳圓也	鹿兒島	吉森吉太郎殿	一金貳圓二錢也	下谷	山名龍宣殿
一金貳圓也	茨木	穴澤善四郎殿	一金壹圓五十錢也	牛込	兒玉御母堂殿
一金貳圓也	遠江	佐藤清一郎殿	一金壹圓五十錢也	神戶	喜多市三郎殿
一金貳圓也	富山	藤森正信殿	一金壹圓五十錢也	埼玉	石井周壽殿
一金貳圓也	高松	蓮井良隨殿	一金壹圓五十錢也	三重	小原徹雄殿
一金貳圓也	富山	由雄なを子殿	一金壹圓也	薩摩	吉見秀殿
一金貳圓也	三重	岸田麗殿	一金壹圓也	長野	佐崎政技殿
一金貳圓也	熊本	江部淳夫殿	一金壹圓也	麴町	上田重知殿
				四谷	星子壽一郎殿
				富山	中島善三郎殿

金澤	同	同	同	同	同	石川	同	大分	新潟	熊本	廣島	熊本	大阪	麴町	廣島	愛知	佐賀	大坂	前橋	同	同
三宅了照殿	同	出雲路宏殿	高野義明殿	泉城澄殿	能村惠殿	大垣圓了殿	原昇殿	古川靜江殿	東弘毅殿	水野齊入殿	五高佛教青年會殿	福島政次郎殿	梶山淺次郎殿	西岡勝次郎殿	富田全定殿	平木熊一殿	某有志殿	城戸貞美殿	尾原勘作殿	石島興殿	

一 金壹圓也
一 金壹圓也
一 金壹圓也
一 金壹圓也
一 金壹圓也
一 金壹圓也
一 金壹圓也
一 金壹圓也
一 金壹圓也
一 金壹圓也

前橋	同	同	同	同	同	同	三河	富山	新瀨	小樽	愛知	山口	麴町	大分	同	同	同	石川	福岡	
德江鶴太郎殿	酒井一二郎殿	藤井藤藏殿	福島磯太郎殿	高田利八郎殿	岩井米吉殿	石井俊三郎殿	守山寬殿	石崎直造殿	中村長吉殿	笠原十八殿	大矢房吉殿	照林寺殿	石山須磨子殿	三浦輝太郎殿	野尻重郎殿	三浦徳四郎殿	阿部祐平殿	坂谷勘右工門殿	伊東時太郎殿	山邊定次郎殿

[illegible][illegible]

金澤	石見	埼玉	石川	同	鹿兒島	大分	府下	山口	群馬	臺灣	廣島	八王寺	芝	千葉	山口	相摸	薩摩	麻布	德島	陸前
安藤義導殿	小笠原了遠殿	志村伴次郎殿	淺井惠定殿	塚田林太郎殿	無名氏殿	桑原節殿	伊藤證信殿	岡原盡麗殿	田中寅吉殿	松浦英太郎殿	青木元四郎殿	湯澤幸吉郎殿	小林昇殿	吉澤善助殿	久津內猶一殿	泉孝三殿	吉峯淨殿	荻原藤吉殿	門田勘四郎殿	鎌田菊技殿

近山	福同	前山	新瀨	廣須賀	石川	熊本	臺灣	香川	同	駒込	薩摩	山口	新瀨	福岡	青森	京橋	山口	山口
江形	岡	橋	口	島	川	本	灣	川	川	込	摩	口	瀨	岡	森	橋	口	口
山原	福澤	八木	桑田	綱島	永尾	中谷	寺崎	無名	藤井	石田	海江	小野	本行	無名	番場	三木	長岡	佐伯
脇田	協中	部智	原寛	太之	沼りう	深徳	貫	名	林	淑	綏	重	雄	氏	健	はる	静	兼
了殿	庸殿	郎殿	一殿	助殿	子殿	本殿	之殿	氏殿	遊殿	子殿	の殿	雄殿	寺殿	氏殿	造殿	子殿	江殿	吉殿

一金四十錢也
一金三十錢也
一金二十錢也
一金二十錢也
一金二十錢也
一金二十錢也
一金二十錢也
一金二十錢也
一金二十錢也
一金二十錢也

同	同	同	同	同	同	前	兵	薩
						橋	庫	摩
鹽	富	高	矢	尾	西	齊	兒	森
入	下	田	部	淵	卷	藤	島	田
國	啓	國	龜	鎮	勘	源	教	ち
太		次	太	吉	次			ゑ
郎	助	郎	郎	郎	郎	造	成	子
殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿	殿

總計金貳千七百九拾壹圓

五拾貳錢也

累計金六千六拾九圓

六拾壹錢也

右之通りに候也

明治四十四年十一月一日

世話人總代
會計監督
西澤善七
長尾收一

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存
候茲に謹みて奉感謝也 近角常觀

近角常觀

近角常觀著

信仰問題

第 六 版

菊版二百頁以上

代價一冊六拾五錢郵稅六錢

如何にして信仰を得可きかと、現時青年の叫にして、如何なる信仰を以て社會を經營すべきかと、は二十世紀の問題也、本書内篇は前の疑問に答へたるものにして、外篇は後の疑問に答へたるもの也

内篇には内的實驗の主義に立ちて現時紛糾亂雜せる哲學、倫理、等の關係に向て直截簡潔なる判斷を下し、宗教の眞髓を攫み來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を叙するに至りて慈光春風の世界に遊びて攝取の清懷に悟融するの想あらしむ。外篇は社會の病源に向て根本的の救済を施こし、理想の淨國を世に實現せんとする者、歐米各國の宗教界及び社會事業を紹介し、翻て佛教原初の眞精神を説き、將來、清新にして且つ健全なる社會的經營を鼓舞し來る、緇く者をして感激奮起せしむるものあり。本書卷首に米國シカゴ青年會館、英國兩院及ウエストミンスター寺院、獨逸ルーテルの聖書翻譯室、佛國宗教歴史大會の寫眞石版圖を掲げ、附録として著者洋行中の通信及び旅行記を收む趣味津津聊か讀者を慰むるに足らむか。

長々品切れのところ今度出來仕候

發行所
發行所

本郷區春木町三丁目廿一
振替東京八二一九番
本郷區森川町一番地
振替東京一六六九六番

森江書店
求道發行所

文學博士 高楠順次郎先生編

佛敎主義 統一日曜學校教案

全一冊
定價 四拾錢
郵税 四錢

文學博士 高楠順次郎先生編
觀音畫伯 曾我五鼎氏 圖案

統一日曜學校用カード

一組 六十一種 美裝箱入 定價十八錢 郵税貳錢

特別 五十組以上 一組金拾六錢 郵税 實費
百組以上 一組金拾五錢
割引 三百組以上 特別に割引す、

東京市小石川大塚窪町二十四

日曜學校教案發行所

振替口座東京參七六九番

近角常觀師序 鈴木龍司著

入信之經路

九月一日發行 正價三拾錢 郵税四錢

著者は宗教家にあらず、僧侶にあらず、たゞ現代に生活し、現代の空氣に觸れ、而も、所謂近代人たるに甘んずることを得ざる一青年也。
然り而して、筆をその幼時の記憶より起し、中學にありては、儒敎的理想と奮闘し無我愛を信じては、進むべきの行路を得、第一高等學校の三年を経過して、文科大學に學びては、所謂灰色の人生觀に満足すること能はずして、張合のなき日暮しをかこち、遂に一事件に遭遇するや、今迄の修養的立場、主觀的立脚地にてはいかにするとも安住の地を見出すこと能はず、一切の思想を捨て直ちに走りて、絶對他力の恩寵に浴し、佛陀切々の慈愛に泣く。狀二十四年の心的經過と相待つて、一の飾りなく、有の儘に告白するもの即ち本書也。哀心止むに止まれぬ欲求を持して、暗黒の裡に彷徨する眞面目なる近代的青年の苦悶の跡萬人の肺腑を衝いて人をして、思はず佛陀の大懷に宿らざるを得ざらしむ。
世の理想なきに苦しむもの、人生問題の歸趣を得ざるに悩むの士是非一讀をすむ

發行所

本郷春木町三丁目廿一 森江書店
振替東京八二一九

申込所

本郷區森川町一番地 求道發行所
振替東京一六六九六

近角常觀編著書目

訂正 增補 信仰之餘瀝

版一十 袖郵定 稅價 四冊 本錢錢

人生と信仰

版三 袖郵定 稅價 四冊 本錢錢

懺悔錄

版七 袖郵定 稅價 貳冊 本錢錢

親鸞聖人の信仰

版貳 袖郵定 稅價 八冊 本錢錢

冠頭 歎異抄

版五 袖郵定 稅價 五冊 本錢錢

冠頭 唯信抄文意抄

版新 袖郵定 稅價 七冊 本錢錢

信仰之餘瀝要略

版二 袖郵定 稅價 五冊 本錢錢

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

申込所 東京市本郷區森川町一 求道發行所
振替東京一六六九六番

規定

- 一 本誌は毎月一回十五日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

部 一ヶ月 一六ヶ月 一年
金拾錢 金拾錢 金六拾錢 金壹圓拾錢 郵税一冊
●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十四年十一月十二日印刷
明治四十四年十一月十五日發行

發行所

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂

前號要目

求道

◎人生と信仰、信仰と人生

講話

◎教行信證『信卷』

《夏季求道會講話》

近角常觀

告白

◎求道生活より信仰生活へ

下井香潤

◎信仰書簡二章

一

柏原あき子

雜錄

寺田榮之丞

◎徹底せざる信仰

近角常觀

時報

◎夏期求道會概況及『教行信證』御眞本

拜見

◎求道會館建設の相談會及其發表

求道第八卷第五號

明治四十四年九月十九日第三種郵便物認可

明治四十四年十一月十五日發行(毎月一回十五日發行)

東京市神田區外土代町二ノ三光堂印刷